

## 第3部

テレビ制作者たちは、  
東日本大震災をどう見たか？



軍司 貞則 委員  
作家



まずは、在京キー局の現役プロデューサー、ディレクターの方々が、東日本大震災下の緊急放送体制をどう見たか。どう感じたか。それをお読みいただきたい。

アンケートでBPO 青少年委員会事務局に送られてきた多様な意見はすべてそのまま載せました。

## 1 制作者アンケート全文

No.	回答
<b>NHK(86名)</b>	
1	テレビ番組の何が必要か何が必要でないか、見つめ直すきっかけになりうる。どの立場の人にとってもそう思いました。
2	NHK、民放が共同し、それぞれ役割を分担して各局同じ様な内容にならないようにできないか？取材体制も含めて…。例えば1チャンネルは原発関連、4チャンネルは被災岩手、6チャンネルは被災宮城など。
3	電力事情や原発、震災の状況などから、NHKと民放各局が協力して、総合災害報道体制を敷くということができないのかと思った。
4	被災地のみなさん以外にも、関係する日本中の方に適切な災害情報を伝えることは大切だと思う。しかし一方で、同じ映像に似かよった情報のチョイス、コメントが連日どの局でも流され、見る人の不安をあおったり、画面酔いさせてしまう事態も招いた。放送局が勝手に興奮してお祭り状態に陥ってしまう側面を象徴していたと思う。見る人の欲するテイスト、本当に必要な情報をそれぞれの局で日頃から考えておくことをしなければいけない。NHKなら全国にネットワークをもつ利点をどういかにしてこうした報道を行うのか、これから報道以外の人間もふくめ、議論が必要になると思う。
5	震災の翌週後半から通常のドラマ撮影を再開しました。こういう時だからこそ、このドラマを見てほしいと言える胸を張れる作品を作りたい、携わりたいと思いました。
6	NHKと民放5ネットワークがともに同じ報道をしていた。6つのネットワークがあることを国として上手く使えていない。これだけ広い地域で被災しているのだから。各局ごとに地域や役割を分担した報道体制がとれないものか？。ACのCMを流す時間があったらもっと伝えるべき情報がたくさんあるはずだ。電力不足になった時は放送局も輪番で放送休止を考えるべきだと思う。
7	こういう緊急時には当然に報道最優先である。一方で多くの方は通常の放送を望んでいるのも確かである。タイミングを見極めるのがとても難しいと感じた。

8	<p>報道、情報番組、ドキュメンタリー番組の果たした役割は大きい。NHKでも報道現場だけではなく、各部から応援要員を出して、各局をあげて緊急報道態勢をバックアップした。定時番組、特集番組が放送休止となっていく状況の中、おこったのがエンターテインメント番組部としてエンターテインメント分野の番組制作で被災者の方々を支援することはできないかという議論。どういう番組がいいのか、放送はいつ頃からなら受け入れられるのか、NHKのネットワークを活かし、東北地方の局から現地の様子や避難所にいる方々の心情など刻々と変わる状況を聞きながら準備を進めていった。そうして企画されたのが『歌でつなごう』というミニ番組。歌手、アーティストのメッセージとアーカイブスの歌唱映像と義援金募集のノルマルからなるシンプルな構成の3分番組である。3/21から様々な時間帯に各波で計23組の歌手、アーティストのバージョンを放送。大きな反響を得た。その後順次放送を再開した。定時番組の中でも番組ごとに様々な取り組みを実施。『鶴瓶の家族に乾杯』では2年前に訪ねた被災地、宮城県石巻市を再訪。「感動した」といった好評意見が数多く寄せられている。今、何が必要なのか、今、何が求められているのか、エンターテインメントの分野でこそできることは何なのか。視聴者目線に立つという原点に立ち返って番組制作のあり方を見つめ直す機会となった。この意識を忘れることなく、一過性でない継続的な取り組みとして長期的展望をもって支援番組制作に取り組んでいきたい。人々の心に寄り添い、人々の心を癒し、楽しませ、勇気づけられるような番組づくりを志望してきた自分にとってそのスタート地点の志を再確認する機会となった。</p>
9	<p>放送は常に「今」のことと切りはなすことはできず、ジャーナリスティックな目線はあらゆるジャンルの番組上必要であると感じた。また放送ができることの無限の可能性と限界を同時に痛感した。</p>
10	<p>エンターテインメント系番組に従事しているので、ニュースが放送され続ける中で、自分たちができることがしばらくなかった。放送局にいながら枠がなければ何もできないという無力感を感じた。少しずつ通常編成に戻っていく中で番組を出せるようになり、被災地の方のメールなど読んでみると、ニュースだけでなく、我々が制作しているような番組も求められていたことがわかった。</p>
11	<p>原子炉への注水時、民放の番組で「CMの後注水開始」など、まるでバラエティ番組かと思うテロップが出された。非常事態の最中であっても視聴率主義がかいま見え、不快だった。</p>
12	<p>視聴者にとって必要な番組は社会状況によって刻一刻と変化していくものである。やはり放送には意義がある。バラエティは無意味だなどの声を耳にすることがあったが、そういったことを考えるのは早計だし、不毛だと思う。社会の安全や生活、文化を向上させる為に必要なことを個々が考え、それをテレビ番組の形にして行けばいいのだと思う。むしろスポンサーや政治体制での絡み、また視聴率との絡みで本質を見失ってしまうことの方が恐ろしい。そして、そうした危機的な状況は震災後、色々な場面で露見しはじめており、テレビとは何かを考えなければいけない局面にあるのにも関わらず、日々の混乱や忙しさから議論すらされていないことに恐ろしさを感じる。</p>

13	<p>震災発生直後は「現在、なにが起きているのか」を多くの人が知りたいと思ったはず。通常編成を変更して報道態勢を組んだことは適切な判断だったと思う。いわば「総論」を伝えられた。発生から5日～1週間ほどすぎると視聴者各々の関心や地域の情報などは細かく異なってくる。この「各論部分」をキメ細かくかつ正確に届けるには（今回の震災は）大きすぎただろう。たとえば民放、NHK各局が総合的に情報を集約し、提供していく枠組みなどを作れないものだろうか。テレビの機動力、即時性をこんな時にこそ最大限に生かすべきだろう。3/11から3カ月が経ち、人々の関心も少しずつシフトしてきた時期だからこそ、被災地の光の部分、影の部分を伝えていく必要があると感じる。自らの制作業務にからんで言えば、気持ちが落ち込んで笑えないような現実直面している時にこそ、感動や笑いを届けるエンターテインメントが必要だという信念がある。こんな時にこそ人々が前向きな気分になれるような番組をブレることなく送り出していきたいと思っている。（3月後半にBSで自分の担当番組がOAされた際、視聴者から「震災報道ばかりで気がめいていたところにたまたま見たバラエティにはりつめていた気分がリラックスでき、素直に笑いながら見ました」という感想をいただき、その気持ちを強く持ちました）。</p>
14	<p>震災4日後、3/15～3/31まで約3週間、仙台放送局へ応援に赴き、被災者の方々へ生活情報番組を送り続けた。「地域放送」として情報を送り出す役割の重要性和「全国放送」の枠の中でそれを行わざるを得ない「限界」との狭間で苦しんだ。</p>
15	<p>制作の現場の温度と震災の現場の温度の著しい違いがあるのでは…と感じた。制作側はかなり早い段階で『NHKスペシャル』のようなある種それまでの事態を総括する番組を作っていたが、あまりにも早すぎると…。放送は「誰に」向けて作るのか、普段つい忘れがちなことを自分にも突き付けられた気がした。また、エンターテインメント番組がこのような時、何ができるのか、どうあるべきなのかを改めて自分にも問い直さねば…と思った。</p>
16	<p>1988年の「天皇報道」、1995年の「阪神大震災報道」の時にそれぞれ感じた思いだが「放送の多様性」が失われ、画一的な報道や番組でテレビ、ラジオが埋められていることに不安を感じた。テレビ、ラジオ、新聞、出版などマスコミの報道がもし「民主主義」というものを守ることが使命であるならば何よりも「多様性」を担保することが大切ではないか。もちろん各放送局、新聞社、出版社の独自の姿勢「社論」といったものもあろうが、横並び一色の報道姿勢となることはかえって報道機関として自らの首を締めていることになりはしないか？ネットの情報が個々に偏りはあるものの「多様性」を保つことによって、支持されている部分もある。様々な意見や主張が自由に語られる場を作ることがマスコミの本来の役割であったが、いつしかそれが一部の（全部のではない）ネット空間に取ってかわられていると感じる。今回の震災、およびデジタル化はテレビ、ラジオ業界が将来像を考える良い契機になると考える。いつまでも既存マスコミ対ネット社会という画一的な対立図式で考えるのではなく、それぞれの長所、短所をカバーしながら民主的な社会や市民の幸福を実現できる新たなネットワークを発想する時期に来ているのかもしれない。そうした新しい発想に寄与できるような番組作りや仕事を今後もやっていきたいと考えている。</p>

17	これだけの大地震こそ、国や官庁、財界、産業界から距離をとって「真実」を伝えなければならないと思う。私の専門はエンターテインメント番組の演出だが、ブレずに常に質の高い知的エンターテインメント番組をつくり続けていきたい。
18	政府、東電、原子力安全委員会、原子力保安院…別々に記者会見があったが、なぜまとめてやらないのか？また、まとめて1本化を要望しなかったのか？その上で事実（実際の数値、子供への20ミリシーベルトの根拠等）をもっと深く取材し、放送すべきだと思う。CNNでは人が乗車している車が流れていく様子を放送していた（死体も）。ある意味事実を放送していた。日本の視聴者には刺激が強いので制限した？
19	発生直後に各局が報道一色の態勢になったことには納得できるが、娯楽番組が放送されるようになるまでに時間がかかりすぎたのではないかと。世の中の雰囲気が沈んでいる時こそ、テレビは率先して世の中を明るくする、勇気づける番組を放送すべきだと思う。また、率先して娯楽番組を放送するよう動くべきはチャンネル数も多く、広告収入に頼らないNHKだと思う。
20	まず、震災報道が優先されるのは当然だと思う。しかし、その報道が誰の利益になるか不明確でかつ、どの局も似かよった内容が多かったように思う。もっと被災者に直接役に立つ内容のものを報道すべき。また、各局の内容も別々の内容を流す（例えば各県別とか）工夫などが求められるのではないかと。
21	マスメディアであるテレビが大災害時に一斉に報道態勢になることは仕方ないこと、むしろ市民のためによいことだと思う。こうした有事には各局が手分けして（協力して）もっと細かな情報を出すべきではないかと思った。
22	最近あまりにもあっさり通常番組に戻ってしまったのが気になる。また、10万人以上が避難生活を送っているのに、東北以外の人々にはすでに「過去の惨事」になりつつあり、その状況にテレビ放送が加担しているように思える。
23	やりすぎ。
24	NHK、民放が緊急時に連携して報道できるシステムづくりをした方が良いと感じた。同じ現場に各社が赴くより効率的に出来るし、取材対象にも迷惑がかからない。
25	現場に行きたい。
26	これまで感じていた漠然としたタイトな空気感がいっそうタイトになってきた。言論統制といえば大げさに聞こえるかもしれないが、現状はそれに近いと感じる。

27	<p>テレビ各局、あるいは新聞、雑誌、さらにはネット等を加えた媒体がある程度「横の連携」を取って情報のある部分を共有した方が良いのか？そういう翼賛的なことではなく、現状のように各局、各社があくまで独自に取材して、独自に放送した方が良いのか？本当に重大な災害、大津波とか原発とかは各局スクープを狙うのではなく、情報を共有しても良いと思うが、無理かもしれません。結局「独占」とか「独自」とか「スクープ」にこだわることから脱け出すことはできないかもしれないですね。NHKの「安否情報番組」は一見いいことをやっているように見えて、全く役に立たないムダな番組ですぐに止めるべきだと思う。金と人間の無駄使い以外何ものでもない。現場の分かっていないトップが「安否情報いいじゃないか」とやっちゃっている感が情けないです。</p>
28	<p>放送のとりわけラジオの役割が大きく感じとれた。放送というとテレビの存在を考えがちだが、震災、停電を体験するとラジオのありがたみがわかった。</p>
29	<p>物事には優先順位があるというだけのこと。現状に応じた番組があり、それがテレビの役割。バラエティの出番が求められる時にバラエティを放送する。緊急報道が求められればそれを。人々の求めるものを放送していただく。</p>
30	<p>娯楽番組がほとんどなくなったとき、何か窮屈なものを感じた。一時、NHKで不正が発覚し、NHKはスポーツや娯楽などは放送する必要がないという意見も少しあったが、もしそうなったらバランスの欠いた放送局として、国民からかえってそっぽを向かれたかもしれないと思う。やはり色々なジャンルの番組が適度に入っているのが良いのではないかと。そして、震災報道が一時、洪水のように流れ、今でも毎回、報道されているが、あまり多すぎると人々は慣れすぎてしまって、関心を失っていくのではないかと思った。放送局だけでできることはないかもしれないが、人々が震災の復興がある程度まで完了するまで、関心を持ち続けられるような方法を考えるべきだと思う。</p>
31	<p>節電が必要なのであれば、放送を止める判断が必要なのではないか？</p>
32	<p>大スポンサー東電の影響が民放に、そして放送には不可欠な電力を供給する企業として原発の報道内容にどれほど干渉してくるのが興味深い。そして、このことは日本のマスコミの存在意義を決める現象だと思う。</p>
33	<p>音楽番組制作者として音楽の必要性を伝えたい反面、安易に音楽＝救いというとらえ方をする番組が増加している事に違和感を持った。</p>
34	<p>良くも悪くもテレビの影響はいまだに大きい。</p>
35	<p>この調査の設問内容の随所に恣意的なものを感じました。あるかたよった方向に結果を誘導しているのかのような…ちょっと不快でした。</p>
36	<p>自分の無力さ。でももっと世の中の力になりたい。</p>
37	<p>大震災直後、様々なニュースが放送される中、NHK教育で放送されていた「被災者から被災者への伝言版」的な番組は非常に有効だったと思う。映像を全く伴わない（文字情報だけ）というアナログな方法でありながら、被災地（避難所）では終始この番組がつけられていたと聞いている。テレビの果たせる一つの重要なあり方であると実感した。</p>

38	非常時になると原発等の情報についても、政府発表や東電発表などの情報のみになり、各局が報道を続けているにも関わらず、同じ情報ばかりが出ているという印象を受けた。日本のニュース取材における風通しの悪さのようなものを実感し、マスコミに関わるものとしてはがゆい思いを持った。
39	エンターテインメントなどを扱う番組はこんな時代だからこそ、より一層意義のあるものになっていくのではないかと思う。少しでもそうしたものが制作できるよう努めたい。
40	各局が一斉に地震ニュースをずっと報じていたが、子供のことなどを考えると通常の番組を早く放送することも必要だと思った。
41	エンターテインメント系の番組を担当している私にとって、地震発生直後の数日間は「仕事」がない状態であった。その為、音楽による応援番組を立案し、「エンターテインメントによる心の支援」はある程度できたように思う。今回の経験は大変貴重なものであったが、その一方、3月中の報道と現状を比較するとNHKと言えどもいかに正しい情報を掴むことが難しいかを痛感させられた。NHKの素早く視聴者の目線に立った番組作りは確かな評価を得ていると思うが、ともすると私たち自身が大変な誤りを流し続けているかもしれないという危機感と修正を怖れない気持ちを持つことが大切だと感じた。
42	公共の為に奉仕し、民主主義の発展に寄与することが存在意義である。NHKの報道部門が危険を冒さないことを大前提に取材するのは理解できるが、納得できない。自衛隊の皆さまのごとく、身を挺して報道にあたってこそその公共放送ではないのか？
43	大震災下ではやむをえなかったと思う。ただ、視聴者が様々な番組を選ぶことができるようなことがなかったのも、視聴者側に不満があったのではないかと。特に西日本ではほとんど影響がなかったにも関わらず、朝から晩まで地震関連の番組を放送しているとさすが嫌になると思う。また、被災者も情報としてはほしいものがたくさんあるが、津波の映像など見たくないという人も多くいたと思う。テレビがそうした多様性に対応できない歯がゆさを感じた。
44	これからの長い復興に向けての日々の中で少しでも被災者の励みや慰めや勇気となる番組を作っていかなければならないと思う。
45	フィクションであるドラマを作る私として3/11前と後で見ると受けとめ方に大きな変化を感じた。身近な家族の反応もそうで、関西出身の私も妻も実家の反応と東京以北の反応とに大きな意識変化を感じた。放送（定時番組）も1度途切れ、番組再開に向けて様々に難しい判断もあった。出演者の間にも大きな不安があった。ドラマのつくり手として、今、何が出来るか、何をすべきかいろいろと考える機会となった。阪神大震災も経験した私としては、今回の規模の大きさ、復興への途上にいまだ立ってない状況。その事態の大きさを改めてかみしめている。これからますます世の中は不況におちいるだろう。なかなか明るい展望を見いだせない状況の中、人々はどんなドラマを見たいのか。そこがこれから我々つくり手に問われてくると思う。けれど、戦後の復興に映画が繁栄したように、今こそフィクションだから出来る、人々が求めるコンテンツがあるように思う。謙虚に今を見つめていきたい。

46	NHK、民放が全て震災報道一色になったのは至しかたないと思うが、NHKが総合、教育からBSまで震災報道一色の編成をしたのはいかがなものかと思う。同じ局が複数のチャンネルをもつ意味をもっと大事にした方が良くはないか？NHK教育の安否放送は阪神大震災の事ならともかく、ネット携帯で安否情報がピンポイントで見られる現在には、全く役立たずのものと感じた。日頃から緊急災害放送の有り方を常に研鑽していく必要がある。
47	ドラマツルギーが変わった。
48	事実を正確に伝えることに専念すべきなのに、番組としての中身をもたせようとするために多少の歪曲やテレビ局の都合によるかざりつけが中継の現場などにあったと思う。残念なことだと思う。
49	制作者としての意思。何をすれば良くなく、何をしなければいけないか。視聴者はその小さい違いに過敏な反応をすると確信しています。
50	どこの局も同じような放送をして、それこそ電力の無駄使いだと言われたいために輪番放送ができればいいと思った。
51	緊急災害時におけるメディアとは何か？考えさせられた。原発に関するニュースは戦時下の大本営発表を連想させる危険性があった。今、何が一番伝えなければならぬとかがつくづく大切だと思う。ドラマとは何かあらためてつきつけられている。あまりに想像を超えた惨状に対して「つくりもの」は視聴者から見すかされてしまう。ドラマにしか描けない「真実」をいかに模索していけるか我々も闘いになると覚悟している。
52	今回の震災時の放送に対して、NHK、民放問わず感じたことは2つあります。1つ目はこの放送は一体誰のためにやっているのかということです。被災者のためなのか、そうじゃない人のためなのか分からない放送ばかりだったと思う。もっと言うと、被災地以外のための放送ばかりだった。そして2つ目に世論をコントロールし、混乱させている一因がテレビにあるということ。誰が悪いだとか、どこどこの人は頑張っているだとか、批判したと思えば持ち上げ、その度に一般人の評価がコントロールされていたと思う。
53	発生時にはソースが少ないので仕方ないが同じ映像の繰り返しになってしまう。他局との連携が取れば良い映像もたくさんあるのでリンク出来ると良い。そういう意味ではK電（携帯電話？）などよりもインターネットの方がより細かい情報を過去に戻って捜せるのは便利であった。NHKがGyaOなどで同じ物を送信、また安否などリンクした意義は大きい。
54	ニュース番組には報道性はあるかもしれませんが、芸術性も娯楽性もありません。ドラマには現代へのメッセージ性や芸術性、娯楽性など多様なニーズが求められます。その中で私なりにつきつめると、多種多様な要素に振り回される中で、結局、自分自身が本当につくりたいものとは何かに行き当たります。そして、そんな私の中で、今回の東日本大震災は、自分があらためてつくりたいもの以外に、つくらなければいけないもの、改めて誰かのための放送番組、何かのための放送番組という立場を久しぶりに自覚させてくれる契機になった出来ごとだと思っています。



55	ACのCMをそうまでして入れずに放送を出し続けるのは不可能だったのでしょうか？民放の仕組みがよくわからないので、ずっと疑問でした。報道の人間ではないので、現場を想像するだけでしたが、これほどの犠牲者が出て、その家族を取材するということは報道側の精神の強さを生半可でなく求められるであろうと感じます。とにかく、今、被災地を忘れさせるか忘れさせないかは我々テレビ業界にかかっていることを肝に命じています。
56	既成の枠組みが崩壊してしまったのだから、やむを得ない。
57	地下鉄サリン事件の後もそうだったが、こういう状況でとりわけフィクションで希望を語る方法論は難しい。
58	これからのドラマの企画は一度リセットして「震災後」という文脈の上でもう一度練りなおすべきと考えます。直接的に関係はなくとも、何故、今（震災後）このドラマを放送するのか、しっかりと答えられるような企画でなければ作るモチベーションがわからない気がする。
59	テレビの重要性、報道の重要性が再認識されたように感じた。普段、テレビを見ていない友人がずっとテレビを見ていたり、Ustreamでニュースを見ながらツイッターをしていたり、やはり情報の信頼性という点でテレビのありがたさはまだ保たれている。しかし、同時にネットの力、便利さもさらに幅広く認知されたと思う。テレビではできないこと、組み合わせればさらに多くの自分が知りたい情報が手に入るという思いを強くした人も多いと思う。今後はさらにテレビとネットの融合、それに合わせた評価基準や番組制作を考えていかなければならないと感じた。
60	ドラマ制作にあたり、これまでは「希望を描くために絶望も描かなければならない」と考えてきたが、震災後の状況の中でそれが視聴者に対して通用するのだろうか、問い直さなければならなかった。
61	全局が報道中心、CM自制をするというのはどうかと思った。東北以外にもTV視聴者はいるので、幅広いニーズにこたえるのもTVの役割だと思う。むしろ、非常時でも放送できる良質なソフトがないことが今のTV局の限界を示しているように思えた。個人的に言えば、毎日の痛ましい映像に気が滅入ってきて、あの時ほどTVを渴望したことがなかった。TVがTVでなくなっていたと思う。
62	基本的に災害情報重視になるのは仕方がないが、役割分担や相互協力ということが各社でできなかったのか。同じ様な情報を各社が同じ様に出しても人や物、金の無駄ではないか、当然、オピニオンの番組などは残すべきだし、各社競合すればよいが、基本的な情報レベルはもっと協力していくべきである。当然、基礎取材がなければ事態を論ずることもできないとは思いますが、もう少しやりようがあると思う。
63	震災直後はエンターテインメント系の番組を見れる心境にはなれなかったので制作することにも逡巡した。しかし、人間は笑って泣いて感動することを基本的に求めているので、良質のエンターテインメントが必要となる時期が遠からず訪れると考えるように至った。この大震災の後だからこそ魂をゆり動かすドラマを作っていきたいと感じた。

64	<p>感じるのは震災報道の一色さ加減。もっと多種多様なものがあっていいはずなのに、なぜか各TV局が一色になっていく。これは何故だろうと考える。我々制作者が無意識の中で一色に染まり、知らないうちに大本営放送を垂れ流ししているのだとすれば、それはそれで問題だと思わざるを得ない。報道に関わらず、ドラマもバラエティも含めて放送には「情」で訴えるものではなく、極めて知性的な「理」が求められるはずだ。我々制作者の理性、知性、メンタリティーが意識的に保たれていかないと、この国を間違った方向に導く尖兵となっていくのだという事を自戒すべきだと思うのだが…。</p>
65	<p>震災を契機に放送と通信の垣根が大きく動いていた様に思われた。必要な情報をオンデマンドで迅速に入手するのにネットが利用される一方でテレビ、新聞の報道に対しては「自由報道協会」の発するメッセージと共に一部では大きく信頼が低下した様に思う。そのことは、その後の官邸報道が事実の追認をくりかえすことによって更に助長された。情報を発信する組織力と事実を構築する検証能力は現状、テレビ、新聞の方に分があるが、信頼を一気に失いかねない既得権益への寄りかかりがあることも事実の様である。いかに、社会に貢献できるかは一人一人の放送人の精根の中のみ存在するのだろう。そのことを個々に自覚しなければならない。</p>
66	<p>情報が画一化されていて、どのチャンネルの切り口も似通っていた。見ていて（不謹慎だが）正直うんざりしている。災害以外の情報もちゃんと流すべき。</p>
67	<p>放送人にとっては語弊を怖れずに言えば「抜き打ちテスト」のようなものだったと思う。つまり、これまでの報道態勢は常に万全だったのかということである。その答えとして、私はテレビの力を改めて感じたと言えると思う。連日続く放送の中で被害状況を把握できたし、それに伴い莫大な義援金が集まったのも事実だ。一方で、被災地の方々にとどのような放送がなされていたのかは分からない。本当に必要な情報が流れていなかったとしたら、その時こそ、地域放送の重要性を見直すべきだろう。</p>
68	<p>平時と同様に番組を与えられた時間と予算を守って制作することが自然や人災への微力な反抗、対応となる…としか考えられずその通り行動した。</p>
69	<p>「がんばろう」という言葉を安易に使いすぎだと思った。その言葉を聞いて被災者はどう感じたのだろうか。「がんばろう」という気持ちを「がんばろう」という言葉ですますのではなく、そう思える番組を制作する事が我々に課せられた使命なのではないだろうか。そして、私はそういう番組を制作していきたいと思った。</p>
70	<p>3/11を境に、価値観が大きく変わったと思う。個人的にも衝撃を受け、家族の大切さや個人の無力さ、社会のシステムの脆弱さ（いままでの豊かさが脆くもはかないものだ）を実感した。震災直後からの放送が緊急報道一色になったことについては、特段の思いはない。ただ、価値観が大きく変わったことで、ドラマ作りが替わると強く思った。お客さんが何を求め何を観たいのか？作り手が何を発信したいか？両側面から大きく変わるという実感がある。</p>

71	<p>テレビが人にとってどういうものか考えさせられた。東京ではNHK、民放合わせと7チャンネルがあるが、あの震災後、一週間以上ほとんどのチャンネルが連日震災報道を1日中流していた。確かに国民の一番の関心はあのときあの震災についてだったが、確かにそういった関心事をリアルタイムで流すメディアはテレビしかないかもしれないが、あのとき私はテレビを少し見なくなった気がする。テレビには色々なジャンルの力があり、それをもつからテレビは強いと思う。色々非難されたが、震災翌日のテレビ東京のバラエティには少し救われた。笑いや感動や興奮を提供するのもテレビの役割だと思い、7チャンネルもあるのだから各チャンネルが自らの局にあった、その局が社会から求められている番組を素直に作ってほしいと思った。視聴率ではなく、視聴者が自らの局が作る番組に何を望んでいるかを考えて制作していくべきだと思った。</p>
72	<p>①情報伝達機能としてのテレビの有効性を再確認した。②専門的解説者（その局に属する）の絶対数の不足③番組制作者がインターネットを情報源とするなげなげさ、視聴者と同レベルの情報に頼ってどうするのか。④ウーマン・オブ・ザ・イヤーは仁科亜季子だとインプリンティングされてしまった自分に茫然。これはサブリミナル効果ではないか？</p>
73	<p>緊急時なので今回の状況は仕方ないと思う。むしろもっときめ細かい報道のあり方、（例えば自衛隊、米軍、官庁、自治体のうごき等）があっても良かったくらい。ドラマ制作者としては如何ともし難い状況であったが、今後新しいドラマ作りに確実に影響を与えると思う。</p>
74	<p>本当のことを伝える放送の原点にもう一度帰るべきだ。表面的なこと、伝えていいことだけしか放送していないのではないか。</p>
75	<p>芸能系番組の制作者として「明るく楽しく笑っていただける」番組を今回のような非常時にどのような内容でどのようなタイミングで放送していけば良いのか。自らの中でも迷いが大きかった。</p>
76	<p>原発問題は今後の日本の将来にかかわる重要な問題であるにもかかわらず、各局ともよくいえばニュートラル、悪く言えば主体性のない報道に終始し、不満が残った。このように強く感じたのは今回が初めてであるが、そもそも Yes か No かの 2 択しかない問題なのであるから、放送局、各番組の出演者ともに自分の立場を解明にした上でなければあらゆる批評、論評は無責任な言葉の積み重ねにしかならない。放送の公平性は Yes の要素と No の要素の数量的なバランスを保つことによって示せばよいのだと思う。原発問題に関し、政府東電の発信する情報を「客観情報」として扱う限り、その報道は政府東電に与するものになるということを肝に命じなければならない。</p>

77	世の中の関心が震災のため、チャンネル全てがそのようになるのは仕方ないようで、本当にいいのかは疑問である。災害のインパクトある映像は作りものでは不可能なリアリティーがあるが、民放含めて「伝えるために流していたであろうか」。視聴率の為的な衝撃映像として出していなかったか？災害を踏み台のように言論をコントロールして批判や様々な考え方をおさえつけていなかったかなど、右ならえ感を感じた。リアルな事実の報道も大切だが、どうしても心のケアが後廻しになっている。エンターテインメント系の番組で自粛しすぎではなかったか？
78	被害状況の報道や被災者への支援となる情報提供が放送局として最優先であることは疑うすべはない。一方で制作が中断したり、中止された番組への配慮がなされたのか疑問が残る。出演者や制作会社へ迷惑をかけないだけの支払いがなされたのか、収録後、放送中止となった番組を放送できるように編成が配慮する必要がある。
79	通常のタイムスケジュール放送に1日も早く戻れるような落ち着いた社会になってほしいと考えた。
80	通常の放送や収録が中止、延期になることは当然です。現在ではやはりテレビの発信力が最も強いと思いますので、緊急報道にすべきです。普段はバラエティや音楽などの娯楽番組を担当していたとしても、こうした体制下ではできる限りの尽力をするのが放送マンとしての役目だと思います。出演者等も当然理解があり、中止、延期によって不満はありません。
81	「持ち場持ち場で全力を尽くすこと」これしかありません。
82	東北など被災地域に住む方々の生活を思いやることは大変重要なことだとは思いますが、ある一方へ向かった番組しかできない状況というのは、例えどんな場合でも望ましくないと思う。
83	通常番組やCMが放送されなかった状況は適切であったと思う。しかし、その判断が遅い為に業務がうまく進行できなかったことがあったのは残念である。各部署で意見がまとまっていなかったことが多かった。最高責任者が決定を下すのが遅いと感じた。各局の様子などを確認しているように思えた。担当者ではないので分からないが、ニュースやワイドショーのメイン各司会者が被災地に行き、レポートをしていたが、何の意味があったのかが疑問である。交通機関が止まっていて、道路も大渋滞であった時にひとつの番組で何人もリポーターを送り込む必要があったのであろうか？
84	バラエティ番組の存在意義について深く考え直しました。
85	もっと多様な番組が放送されても良いと思いました。各局のポリシーの無さが露呈されてしまったように感じました。でも、番組制作者としては、それも仕方ないことだとは思っております。

86	<p>震災報道のあり方として安物のドラマのような感動だけを押し売りするリポートが増えているのはテレビ人の劣化を示していると思う。横並びで似たような反応、似たような報道をしているのはマスメディアの存在意義を低下させたと思う。震災が日本へ及ぼす影響をロングスパンでとらえている人間が少なすぎるし、震災を経てもマスメディアは惰性で動いているようにしか見えず、情ない。明らかにしてインターネットメディアに質量、速さともに負けていたと思う。エンターテイメント部門も深く考えて行動し、放送しているようにはとても思えない。これが日本のメディアのレベルなのだろうとがっかりした。</p>
----	---

日本テレビ(83名)	
87	<p>ACが多すぎたのではと思います。</p>
88	<p>各地方は地方局により地元の様子、状況がよくわかったという声とともに、キー局は災害地の様子を全般に伝えようとする事で「関東ローカル」としての役割を果たしていなかったという声が聞かれました。千葉などが特に被災しているにも関わらず報道が薄いという印象だったようです。キー局の役割と関東ローカルの役割を民放は意識できているのか…考えさせられました。</p>
89	<p>震災後、絶え間なく流される悲惨な映像の中で、人々は確実にテレビを求めている。そう思う。笑いが、安心が、安らぎが足りていなかった。火曜の8時に弊社が『踊るさんま御殿』をOAした時、視聴者センターにはお礼の電話がたくさん入ったと人づてに聞いた(本当はその前の7時からL字付きで通常放送を行っていたけれど)明石家さんまさんの安心できる笑いに、間違いなくたくさんの人が癒されたはずだ。当時、自分は1月期の連続ドラマ『美咲ナンバーワン!』を担当していた。視聴率的には良い結果ではなかったが、震災後の3/16にOAした最終回の後、たまたまインターネットで見つけたブログに「こういった時だからこそ、安心して見れるハッピーエンドのドラマを見て、心が救われた」と言った旨の書き込みを見た。震災の中で「こんな時にテレビを作っている場合なのか?」という思いが胸をよぎったのは自分だけではないはずだ。しかし、自分達の仕事にはやはり価値がある!と心から思えたのも事実だ。世間からしたら、ツイッターの速時性や近隣ネットワークのリアルな人付き合いといった事の方が価値がある、見なおされたことだろう。でも、私にとっては「地上波が当たり前に流れている」という安心感の方が大きく感じられた。私は信じる。テレビの力を。</p>

90	私自身はドラマ制作者であり、大震災関連の報道には一切関わることがなかったのですが、このような震災の時に毎度言われていることであります。全局が同じ情報を追っかけて報道するという体制は今回も何も変化なく終わってしまいました。各局に何の情報を流すのかという振り分け等の施策を民放各局はやはり利益優先であり、視聴率も見過ごすわけにはいかない状況ですので、政府なりの上からの命令等で情報をより効率良く流す方策を考えなくてはいけないと思います。まあ、これに対しても報道局員とそれ以外ではそれぞれ意見があって食い違ふんですね。やっぱりゴリゴリ現場に入って行って取材するのはマスコミの本性ですから、それをなくそうにもなくせないですね。それが必要なこともありますから。あと、ドラマ制作者として、こんな時にドラマの撮影を続けてもいいのかと悩みましたが、自分なりの言い訳？役割を見つけられたら乗り越えていけました。バラエティ担当の人は相当大変だったと思います。
91	色々な自粛は当然のことではあるが、メディア（放送、広告）は景気をけん引していく役割を多分にならなっているので、世間の気分を注視しながらもより活発な放送を目指すべきである。
92	CMが放送されないということに特化しての感想は特にない。
93	「終わらなき日常」の終えん…。テレビに限らず、クリエイターたちのベース（社会をどう捉えるか？）が一瞬にして崩壊した。戦後65年、初めて日本人が「明日はどうなるかわからない…」ということを感じた事象だったのではないかと。表面上は今はまだ日常を取り戻しつつある日本&日本人だが、このまま「何もなかった」ことにするのかそれとも新しい何か生まれるのか、そこの一端をテレビも担っていると思う。ただ…私たちは再び新しい何かを得るためにはあまりにも色んなものを持ちすぎている。いろんな「快樂や快適」を知りすぎている。それをすべて捨てる決意や勇気が持てるのか…？自分も含めて今はその岐路に立っていると思います。
94	公共広告機構のCMのあまりの多さにへきえきした。今回のような非常時に緊急報道体制が取られることは当然で、エンターテインメント番組の放送がとぶのは仕方ないことであると思う。ただ、いつの時点から、通常放送に戻すかの判断は難しいが、今回のこの非常時における各局の放送体制は適切であったと思われる。
95	報道は確かに必要ではあるが、今の日本の記者クラブ制を考えると大して有用ではないなあと感じました。バラエティも再編集のものばかりだったので、少し物足りなかった。仕方ないが…。CMがすべてACに切りかわり、仕方ないのに苦情が殺到したことが悲しかった。CMがなければTVを見ることができないのに。
96	まず、手前味噌ではありますが、何よりテレビが持つ情報波及の力を感じました。情報を集めるその力と伝える力、これが無ければ今回の震災下において、多くの人々がより強い不安にさいなまれたことと思います。ですが、裏を返せばそれだけの「力」をにぎっているのだということに改めて実感する中で、制作者として、その意味を理解せねばならないということを感じ、考える時期となりました。
97	各局が報道合戦のようになっていたのが残念だった。

98	ドラマなどの娯楽作品を制作している場合ではないのではないか？など自分達の足元の根幹を揺るがす程、動揺したが、こんな時だからこそ、厳しい日常を一時でも忘れられるような作品を作りたいと切り替えて作ることができた。
99	停電の前では無力、届けるべきエリアに情報届いてない。CMが流れた時、お笑い番組が流れた時、どこかホッとした気分になった…。後出しじゃんけんのようにポロポロ出てくる原発の情報はその時その時で調査報道することができなかったのか、大いに疑問。そして、サラリーマンであるということが記者会見の会場にいた局の報道記者と呼ばれている人たちの発言やら問いつめ方やらに感じられ、がっかり。さらに「報道する尺があること」の不自由さをニコ動などを見ていて尺関係なく全てを見せることができるメディアと比較して、テレビの負けを実感しました。
100	この非常の事態の中でTVの「報道」と「娯楽」の役割どちらもが改めて認識されたと思う。しかし、それは同時にそれぞれの役割の限界というか、（否定的な意味ではないのだが）領分というのも明確にしたような気がする。まず「報道」の役割でいうと「現在、何が起きているのか？」「それは何が原因であるのか？」といったことについて、メディアの責任というものを前提にすれば「確か」なものしか報道できない。しかし「原発」に代表されるように国民（視聴者）はその先のこと「これからどうなるのか？」「どのようになる可能性があるのか？」ということも当然知りたがる。これについてマスメディアは事の重大性に鑑みて、「可能性」を多く語ることを控えることになる。これは仕方のないことで、その間を埋めるものとして、ツイッター、インターネットというものがまたその存在意義を発揮した。そこには「ゴミ」のような情報も多いが、見る者がきちんと主体的に向かい合えばインチキ臭いものは「自己責任」かなり分別できるということも判った。即ちTVを代表とするマスメディアと「個」を発信源としてマス目の目にさらされる「ネット系」メディアが補完し合う存在であることが明確になった。そして「娯楽」。「日常の中の娯楽」というものが人の心をどれだけホッとさせるかも、やはり認識できた。しかし、その分、「手抜き」「ご都合主義」は厳しく、淘汰される空気になった気がする。
101	緊急態勢をとるのは当然といえる出来ごとだったと思います。興味本位の報道にならないように注意する必要があると思います（民放について）。ACへの差し替えがいつも話題になるので、対応策を考えてもいいのではないかと思います。
102	どのトーンで放送すべきか正解が誰もわからない中で放送する時間が近づいてきた時、本当に悩んだ。テレビは社会的責任や志などがクローズアップされたたとんに弱くなる。民放ってどの立場で物作りしなくちゃいけないの？とこういう大きな出来事があるたびにわからなくなる。

103	番組制作者の私も視聴者と同様に東日本大震災の映像を見て心を痛めていました。それは、報道関係、バラエティ関係ほどジャンルは違えど、皆同じだと思います。震災後、各局、特別編成で震災のニュースを扱っていましたが、それについて制作者は皆、理解を示し、「今、必要な情報を！」という思いがあったと思います（感じました）。私は今、バラエティ番組の制作を行っているのですが、震災後は今、自分が作っている番組の中に「視聴者にとって直接有益ではないかもしれないが、何か心をホッとさせられるような要素を入れたい」と考えるようになりました。その思いは他の制作者も同じ（話をするとそう感じられました）です。当たり前ですが番組制作者も人間。報道、バラエティ問わず、今後のテレビは今までよりもちょっと“やさしい”ものになると思います。
104	全てのジャンルでやるべきことをやるべき時に行ったと思います。
105	有事の際にこういった対応をするのは自然な事で、大多数の人が求めていることだと思います。しかし、気が滅入るようなニュースばかりの中で、いち早くバラエティを放送した（せざるを得なかった）テレ東には和みました。各局の役割分担みたいなものがあればもっと良かったと思います。
106	各局の内容が似かよってしまうのはしょうがないが、協力、分担しても良いのではと思った。これほどの災害なので。
107	NHK 以外の民放は、一本化協力して同じ放送を作るべきかもと感じました（労力の効率化、節電、内容の充実を含めて）。
108	バラエティ番組が作りづらい状況はあったが、被災地の方々含め、そういうものが見たいという気持ちはあると信じて作り続けてきた。視聴率を見ても、やはり「笑いたい」「楽しみたい」というニーズはあるのだと思い、少し安心した。
109	地震が起き、自分の番組のOAが延期になりました。その時「こういう時だからこそバラエティが必要なのだ」という思いと「不謹慎だから放送は自制すべきだ」と思いがありました。ただ、バラエティ局に在籍している一個人としての意見としてはどのチャンネルをひねっても地震速報、地震速報、地震速報を横並びで放送しているより、被災地の子供、お年寄りが笑える、和める番組を放送してもよかったのでは？と思います。一部の視聴者に怒られても、被災地の方のことを思うなら非常時だからこそフレキシブルに対応できたらいいのに、と。現状そういった「冒険的なこと」をするのは難しいとは思いますが…。



110	番組制作者としてまずは被災された方々、ご家族のことを強く考え、不快な気持ちを与えない、少しでも明るい気持ちになれるかもしれないネタのセレクトを徹底しました。また、日本全国が原発の恐怖に怯える状況の中、自身も同じ恐怖を感じる中で、“視聴者がどう感じるか”ということに非常に（ある意味）一番敏感になりながら番組制作をしていると思います。しばらく、報道の緊急特番が続き、バラエティ番組制作者としても当初は自分たちの番組から笑顔やお笑いなどを発信することに少しながら戸惑いをおぼえたこともあります。しかし、自分自身の祖母や彼女たちの世代が「もう暗いニュースはたくさん…明るい、いつものバラエティ番組が観たいわ」というようにコメントしていた時は、どこか救われた気分…制作者としてテレビを通して笑顔や勇気を届けるのも立派な使命なのだと思うようになりました。今もその思いの中で番組制作を続けています。
111	テレビというのは多くの人に触れるメディアであり、正しいと信じてもらっているメディアでもある。だが、他にも多くのメディアがある中で統制などがあり、表に出ない情報、画が多いのも事実。普通の人ももう気付いてしまっている。より、正しい素早いメディアであるべく、テレビも多くの人達（政治、経済）と関わり、その正しさを語り合うべきだろうと感じた。
112	非常時でも自分の仕事内容は変わらないので、目の前の仕事に粛々と取り組むこと。
113	震災直後、地上波は報道ばかりでバラエティがなくなった。YouTubeなど投稿動画のネットの世界では日本全体を励ますパッケージがあふれていた。ACのCMを流すのならば、もっとよいCMを番組枠を削ってでもテレビ業界が率先して作れない現状にあきれた。スポンサーを気にした変な現場の自粛より、もっとバラエティの現場だからこそできるコトを、とりまとめるコトも動き出す人も誰もいない我が社にがっかりした。テレビ業界がデカすぎてフットワークが悪いのと、組織、所属人員の高齢化の弊害なんだとは思う。震災後はテレビがつまらなくて映画ばかり見るようになった若者もいる。自分がメディアにいながら何も出来ないことが一番悔しかった。
114	「伝えること」、「テレビの力が役に立つこと」は果たして今、自分がやっていることとイコールなのかという疑問はしばらく続いた。草の根的なパーソナルな情報収集→テレビの伝波力で“電播”するべきで、死者が何人になったとか「怖い津波の映像」とテロップ出して延々と流し続けるのは、本当の目的を見失っている気がした。
115	様々な思いはあるにせよ、こういう時こそ「テレビは楽しく」という考えです。

116	<p>有事の際の基幹メディアであるテレビが社会的役割を果たし、利益を度外視して緊急報道態勢をとる事は飲食メーカーが被災地に救援物資を送る事と同様、人間的にも企業としても必然と      思っていますし、その時点で国民にとってバラエティやCMのニーズはなくなっている事も考      え、的確な作業をしていたと思います。しかし、テレビがどれだけ国民のニーズに応える事が      できたのでしょうか。それは分かりません。悲惨な被災地の状況ばかりをスクープしていたテ      レビに疑問をもたれた方もいるかもしれません。でも、これらの映像が世界から多額の義援金      を集める力となった事には疑いがありません。細かい事で批判されやすいテレビですが、広い      目で見て頂ければ国民の役に立ちたい精神で番組をつくっている事を御理解される事と思いま      す。</p>
117	<p>各局が横並びの報道特番を放送している中で、バラエティ番組が数字を取っていたことが印象      に残っています（震災後4~5日後だったと思いますが…）。内容については細心の注意が必要      ですが、いつも家庭に日常にあるテレビが率先してフツと笑えて、気持ちが楽になるようなバ      ラエティを提供する意義は大きいと思います。選択の自由を視聴者に与えるためにも各局がコ      ミュニケーションを取って、報道とバラエティのバランスが取れば良いのですが…。</p>
118	<p>各局、インパクトある映像を繰り返し流して、情報性が全くない、という印象だった。ジ      ャーナリズムの正義とエンターテイメントが折り合っていないそのひずみが見事に浮き出たとい      う印象。あんなのを繰り返し見せ続ける事は誰も幸せにならないと感じた。これ程の大惨事を      前にテレビが報道機関としてやれる事の少なさを思い知らされた。一方でACのCMの「AC」      の読み上げの音が明るすぎるという視聴者からの批判の声には本当に驚かされた。その批判す      るエネルギーを別の事に使えば日本はもっと良い国になるのにと思わざるを得ない出来事でした。</p>
119	<p>バラエティ番組を見て、直接的に勇気づけられたり、苦しく辛い事を忘れられると客観的には      思わないが、間違いなく役割はあるとは感じた。非常事態に対して、特別な事で対処する必要      は正直ないと思う。むしろ、あくまでの日常を届けることが何よりの力になる可能性がある      と個人的には思います。</p>
120	<p>いちはやくGP帯のバラエティ番組を通常放送したのが日本テレビでしかも、自分の担当して      る番組の自分の担当したVTRだった。反応がこわかったが、久々にいつものバラエティを見て      ホットしたという声もあり、バラエティの意義というものを改めて考えさせられた。</p>
121	<p>私の担当する番組は、テレビ東京を除く民放のバラエティ番組の中で最も早く放送を再開しま      した。それは局の決定であり、私自身は今放送することに意味が有るのか、正直迷いました。      放送後、視聴者の皆様の反応は賛否両論でしたが、連日、津波の恐ろしい映像ばかりが画面に      映しだされる中で、久しぶりに笑顔を取り戻すことができたという感謝の意味はあったと思いま      す。</p>
122	<p>初めての大災害。まず、電波を出し続けただけでも日本人としての連帯感が生まれたと思いま      す。その上、初めに早く番組をOAしたのは我々のプライド（誇り）です。</p>

123	「ためになる」って何だろう？「悲しい」って何だろう？「楽しい」って何だろう？「面白い」って何だろう？「つまらない」って何だろう？「くだらない」って何だろう？TVのできるこ とって何だろうと思いました。
124	テレビ局は非常時のために存在するので、地震や事故などが起きた場合は、できる限り報道態 勢を整え、有益な情報を流し続けるべきだし、今回もそれができたと思う。ただし、視聴者が 求めている情報というのは多岐に渡っているのですべてに答えることができる訳ではない。よ って、非常に難しいとは思いますが、日テレは被災地の情報、フジテレビは救援物資についてなど、 各局で違う内容をOAすることができれば良いのだが…。同じ被災地に民放各局が中継車を出 しても…と思った。一方、暗いニュースばかりを流し続けていると、PTSDになる恐れもある ので、遺族のこともあるが、民放は娯楽番組をOAしていく姿勢も重要である。今回は民放で 一番最初にバラエティ番組をOAしたのは日本テレビであるが、思いきった決定だったが、非 常に大事な役目を果たしたと思う。
125	AC 差し替え CM で多くのクレームが出たことは事実です。特に短時間の間に同じ CM (AC の) が流れ、耳障りな音が視聴者の気分を害した結果を受け、今後、民放各局では有事の際のより 一層の対応が求められることは当然だと考えます。「見たくないもの」も目に飛び込んでくる のが、テレビの習性です。しかし、地デジ化などにより、視聴者と双方向のやりとりができる 時代に突入したわけですから。例えば有事の際、差し替えの CM 部分は視聴者の個々の判断で 「見る」「見ない」の決定ができるようなシステムを構築していくことも必要ではないでしょ うか。
126	放送局として、このような緊急の態勢で、長い間震災関係に時間が割かれたのは当たり前のこと であるが、一方で各局、似たようなことを長時間続けたのは大いなるムダであるとも思う。
127	仕方がないと言いか言いがありませんが、一視聴者としてもあの AC の CM 量は辛いもの がありました。未曾有の災害ですのでその対応も決まったものは無いと思いますが、NHK の通常 放送をししばらく休んでの報道態勢は流石だと感じました。民放ではあれが限界でしょう。こ ういう時にバラエティの創り手はどうしたらいいのか…その答えは個人的には見つかっていま せん。やはり時代と向き合ったバラエティを制作していくしか道はないでしょう。暗中模索し ながら…。
128	民放、NHK かかわらず、TV ができることを見極める民間の上部機関が必要との思いを強くし た。「国難」である！「テレビ界」は「国難」にどう対応し、どう「業界」を守るか？各局が 同じ映像でニュースを流すのがよいか？テレビ界が一丸となってチャリティーに取り組むべき？ 節電は？24 時間放送態勢は正しいか？などなど、一つの株式会社では判断できないことが多 かった。「テレビ界」は「頼りない」業界だった。国民、視聴者の信頼を失ったと考えます。ま ぎれもない「低成長（縮小）産業」なのでもっとまとまるべきです。
129	有事下ということで、当然のことだったと思うが、視聴者の本当に見たいものは何かという原 点に立って考えるべきであったと思う。自粛が過ぎたのではないかな。

130	テレビの力の大きさ、そしてテレビへの見る目の厳しさを感じました。まずはテレビの力。私は報道の人間ではありませんが、やはり災害時のテレビは非常に優秀だと思いました。地震があればほとんどの人がテレビを見たと思いますし、様々な意見はあるでしょうが、テレビは絶対に必要なモノだと感じました。テレビへの世間の目の厳しさ。バラエティをやる人間として、ロケができなくなる環境はなかなか辛いものでした。こういう状況だからこそ…という思いでやっても電気のムダと言われることが非常に悔しかったです。テレビは決して電気の無駄ではありません。価値があるモノだと信じてこれからもがんばっていきたいと思います。
131	一人のバラエティ番組制作者として、何ができるのか考えました。何が求められているのか、どういう姿勢で作るべきか考えました。バラエティというジャンルだからこそ、皆真剣だったと思います。
132	災害時に先日行ったような緊急報道態勢をとるのは当然だと思う反面、被災者が求めている放送とはどういったものなのか？疑問に思うところもありました。何人死んだ！家が全て流されたなどセンセーショナルな刺激の強い映像を永遠流しているような…バラエティ番組を日テレは他局に比べて早く放送再開してましたが、不謹慎だ！！という意見も多々あったと思います。しかし、自分が被災していたら、災害報道ばかり観ていたいのか？全局同じ映像ばかり流れているものが意味があるのか？少し傲慢な意見だとは思いますが、こんな落ち込んだときこそバラエティ番組が果たす役割があると思います。そもそもバラエティとは幸せな人が観るというより「元気にしてくれる」メディアであって欲しいし、そうありたいと強く思っています！！
133	やはりテレビは国民の力となるモノ。情報伝達手段でもあり、娯楽として励みになるモノでもあるなあと思いました。
134	もっと早くバラエティ番組を見て安心したかった。津波の映像ばかりが流され、PTSDになりそうになった。そんな人々に安心を与えられる様、バラエティ番組を放送してほしかった。歌や笑いは人々を安心させる力がある。その力を改めて実感した。
135	こうした非常時には（その番組内容が笑いであれ、超バラエティであれ）キチンとしたテーマやメッセージが根底にある番組だけが自信をもって放送できるんだなあ…と思いました。
136	番組制作に関わって丸2年が経つが、今回の震災でバラエティ番組の制作者として、無力さを痛感した。大災害の混乱の中でなぜおもしろさを追求した仕事をしなければならないのか正直わからず、バラエティ番組制作に携わる身として、また、テレビ局の人間として、何をすべきなのか考えながらも、この緊急事態の中で人の役に立っているという実感のないまま過ごしていたと思う。しかし、バラエティ番組の放送が再開した時、視聴者センターに寄せられた意見で、「バラエティを見て元気が出た」という声があることをこの大災害の混乱の中でも、バラエティ番組を制作し続けることの意味を感じた。しかし、個人的には節電などの対応が急がれている中では、輪番放送などの対応も検討の余地があるのではないかと思う。
137	長期に渡り、全局報道番組編成になることに違和感を覚えた。エンターテインメント番組を放送すると「不謹慎だ」などとすぐ苦情が寄せられることに疑問を感じた。

138	バラエティ番組の制作者としては、震災後の報道態勢がバラエティ番組の放送を再開する際に支持する声が多かったように感じたことが励みになりました。厳しい現実の直面した時にエンターテインメントが少しでも人々の心をホッとさせることができたのかなど。ただ、同じテレビ局で報道が軒並みバッシングを受けて、批判ばかりが目立つことは、あらためてテレビが今、厳しい目で見られていて反感を買いやすいのだろうと、再認識させられましたし、それはバラエティも同じなのだろうと思いました。
139	緊急時の報道が大切なのは言うまでもないが、通常放送に戻った時の視聴者の反応を見ると、笑いが求められていたのだなあ…と感じた。色々批判も多いがテレビ（バラエティ番組）は幸せな時間を届けているのだと思う。
140	テレビ局として何ができるのか。生の映像で現在起きていることをそのまま伝えることができるテレビはこうした非常時にもっと役に立つことができたのではないか。津波情報にしても、今まで地震がくるたびに何十回、何百回とテロップが出て、津波〇〇cm、1mなどと表示されていたが、今回7mという表示が出て目を疑った。また、現場の映像では松林をはるかに超えた大津波が襲ってきていた。予想津波の大きさを誤っていた気象庁にも問題はあがあるが、7mという巨大な津波が来るなら、その数値を大きな文字にして画面に出すことも可能であっただろうし、松林を超える大津波を見たら、すぐにその情報を他地域への警告として、繰り返し注意コメントを発することもできたかもしれない。今後は、現場の状況を伝えるだけでなく、現場の人々の命を救うための放送ができるよう、今から検討を重ね、準備をしておくべきではないだろうか。また、TVには、報道の面の他に番組を通して夢や希望、笑いを届ける面もある。阪神大震災の時、数週間たって、家族も家もなくなってしまった中年の男性が久しぶりにバラエティ番組が放送されて見たが、声を出して笑った。今まで絶望のどん底にあり、将来の事など全く考える気もしなかったが、笑ってテレビを見ていたら、なぜか未来に向かっていかなきゃという気持ちがわいてきた。という新聞のインタビュー記事を読んだ。今回も緊急報道体制からいつ普通の放送に戻っても良いように、気持ちの面でもしっかりとその事を心に思いながら、スタンバイしていた。TVの出来る事は非常に多いし、やり方によっては多くの人々を救う事ができると実感した。テレビに関わる人間として、テレビの役割を再認識した。
141	速報性はあるが、情報を整理する力に欠けると感じた。バラエティ番組においてはネタのチョイスに制限が生じたが、基準がない（ないのは当然だが「これが基準」と責任を持った仕切りがない）まま動くはめになり、迷走した。
142	被災者の方々の心情を配慮するあまり、行きすぎた演出規制が心配されたが、編成部のリーダーシップにより、適格なレベルの規制にとどまり、意外と安心した。

143	非常事態なので、全てが報道特番になるのは仕方ないと思いますが、どれだけ被災者やその関係者に有益な情報が流れたのか疑問でした。実際に仙台で被災した友人からメールが届き、その内容は「もっと被災した人向けの情報が欲しい」というものでした。〇〇に行けば食料がある。トイレはどこ？避難所はどこ？正直、東京にいる自分はそんな細かい情報まで理解できないと思いましたが、本当に被災者の事を考えるのであれば、家が流される画よりこういった情報なのかと思いました。ただ、細かい情報をどのように入手し、放送で伝えるのかは今後の課題だと思います。
144	「放送できない内容」が大量に出たことが不安だった。何がダメなのか、いつならいいのか制作者側も判断が各々異なり、難しかった。
145	各局が横並びで同じ事を放送するのではなく、一緒にプランを作って多様性をもった放送ができたなら良かったと思う。
146	放送局としてできること、やらなければいけないこと、求められていること、最後まで背負わなければいけない責任…色々なことを考えさせられました。こういう時に横並びで各局手分けをした情報発信ができないか。個人の安否を知らせるすべ、個人情報をごどこまで背負えるのか、“日常”やら“笑い”を届けたいなどという正義は本当の被災地の人にとってはどううつてるんだろうなどなど…。 “民放”とはいえの“免許事業”であることの“公共性”と一私企業としての線引きは、とても難しいと感じました。
147	生放送番組ではなく、収録、編集作業を経て放送することの多い番組では、先の放送タイミングの状況が見えず、様々なケースを想定しての準備作業は非常に難しいものだと感じた。非常時における視聴者のニーズについて、様々な考える機会となった。特に被災した方々とそうでない視聴者で大きな考えの相違が当然あり、向き合い方は平時から意識すべきと感じた。
148	バラエティの制作なので…できることは少ないと感じました。
149	テレビ制作者としては普段バラエティを制作している人間としては、緊急報道態勢の放送に対して、3/11から数日間は自分の無力さを痛感いたしました。そして徐々に通常編成に戻る中で改めて「テレビ」の役割を考えたと思います。私自身、テレビ制作者である以前に普通に家族と暮らす一人の視聴者、生活者である事を再認識し、テレビがどんな時でも良くも悪くも人の心を強く影響を与える力を考え、今後の番組制作で「人の気持ち」を今まで以上に考えて番組をつくっていかうと深く考えたタイミングでした。
150	本当に厳しい状況になった時、バラエティは無力だと思い知りました。だからこそ、バラエティが放送できる時には、全力で世の中を Happy にしなければと強く思いました。
151	職業病なのか、チャンネルを回してより過激な映像を探してしまった。だが、テレビの報道機関としての使命を考えると、より強い画を流すことよりも大事なものは、正確な情報を公平に伝えること。テレビとは何か？報道とは何か？を考え直すきっかけとなった。
152	東日本大震災の時、電気がある地域は一早くテレビ等によって情報を得ることができた。しかし、本当に情報が必要な地域には情報がなかった。現実を放送人としてどう考えていくかが問題であると感じた。

153	番組がどうこうと言ってるような事態ではなかったので、災害報道というテレビ局の使命を果たすのが一番と思いました。このような中、バラエティ番組を作ることの意味や難しさを感じました。
154	自分がおもしろいと思ってたものをそのまま放送できないという状況もあり、ジレンマを感じたこともありました。
155	民放各局が似たような内容の放送をしていたので、民放各局がタッグを組んで情報を伝えると良いと思った。
156	震災があり、番組制作者としての責任を改めて強く感じた。報道に限らず、バラエティの現場においても気をつけなくてはならない点が多く、今までになく視聴者のとらえ方を考えながら番組を作っていた。
157	「こんな時だからお笑いを」ではなく、自分がお笑いしかできないんだから、こんな時でもお笑いを黙々とやっていくしかないな、と思いました。そんな自分がはがゆくもありつつ、30年生きてきた業として、もう背負っていくしかないなど。でもその代わり、どれだけ東京が放射能で汚染されても、残ってテレビづくりを続けてやる！！と決意しました。
158	非常時については全力を挙げて放送が出来たと感じるが、2～3ヶ月後にはニュースとして薄まっていることに少し不安を感じる。
159	必要な情報、メディアに求められるものが変わっている時には、素直に向き合うしかありません。当時は1日でも早く通常番組に戻ることができればそれは一面において、幸福なことであると思いました。当時の報道の映像には作りモノには決してマネできない、大きな力がありました。現実の映像に圧倒されてしまい、作りモノのバラエティで笑ってることは「幸せ」なことだと思いました。
160	過度の自粛抑制。
161	「高価なもの」「ぜいたくなもの」が「不謹慎」で「放送に不適切」というムードが広がり、番組作りに多少の影響が出た。しかし、クレームの多くが被災地と関係ない人々でむしろ被災者からエールをいただくことが多かったりと何ともいえない期間だった（今もまた多少続いているが…）。
162	今回の震災報道を見ていて、改めてTV番組の重要性を再認識することとなった。理由は大きく2つある。①テレビ報道の優位性…テレビはとにかく早かった。津波の情報を時々刻々と伝えることのできるメディアは他になく、またネットなどの速報性と比べると圧倒的に信頼性があった。新聞にもネットにもできないテレビ報道の在り方が全面に出ていたように思う。②バラエティ番組の重要性…震災後、初めて通常番組編成に戻した3/15(火)。NTVは19時からバラエティ番組を放送した。賛否両論あったものの、フタを開けてみると各番組15%前後の高視聴率。バラエティ番組が世間から求められているのを実感した瞬間だった。報道においても、バラエティにおいても有事において、存在感を発揮し、テレビ番組の有用性を再認識させることとなったに違いない。

163	比較的影響は少なかったと思うが、スタッフ、演者及び本人のモチベーションを保つのが大変であった。映像制作者としてはあの津波の画のあとに、何があるのだろうかとも考えた。
164	様々な人からいろいろな媒体を通してテレビの報道に対する“バッシング”に心が痛んだ。被災地での行動や悲惨な映像をドラマチックに流す民放テレビ番組への非難の声が多かった。バラエティ局に所属する身分として、報道番組に参加できずにいることがもどかしく感じた。情報番組にいた時は被災地やその家族が役立つであろう情報を放送できたのに…自分ができる支援はこんなことしかできないのに…とノウハウを持っていたのに発揮できない自分がくやしかった。
165	私は震災の影響で放送内容の差し替え、繰り越しに直面したので、その点は制作者としては残念に思いました。ただ、一人間として、テレビの役割としてはそれもやむをえないかと考えておりました。どこの局でも震災放送、公共広告ばかりといった所には何かしらの改善ができるのではと考えます。
166	情報番組系の部署よりバラエティ番組系の部署に移動したばかりであり、これまでの自分ならそのような“大事”にも直接制作者（ディレクター）として関係する仕事をしていたのが、真逆の“バラエティ”を作る作業に従事せざるをえず、戸惑いの中でその状況を過ごしました。正直、テレビマンとして無力感をおぼえた事もありました。このような“大事”の後に“ニュース”以外にも視聴者から求められる“番組”を作っていきたいと思っています。
167	有事の際に通常の放送内容を維持できない番組が続いた。もちろん、震災放送や被災者心情は考慮されるべきであるが、過剰な自主規制は娯楽としてのテレビ番組の価値そのものを下げる事になりかねない。という怖さを感じた。
168	今回、未曾有の大震災が発生し、緊急報道態勢がとられたのは当然の事と思いました。どの局が一番最初に、そしてどのタイミングで通常の放送体制に戻すのかも、何度も議論され、決定されたのだと思います。震災から3カ月。バラエティ番組を制作する者として、不自由な生活を強いられている地域、そして多くの人がいるのに、笑いを追求している場合なのか、そんな思いもあります。しかし、そんな事を思っても現状は変わりません。一方的ではありますが、自分の携わった番組が、被災された人に力を与えていると信じて、これまで以上に番組制作に取り組んでいきたいと考えています。
169	テレビができること。テレビマンとしての自分ができること。を考えるきっかけになりました。

<b>TBS(70名)</b>	
170	発生当初は被害状況の大きさにただ唖然とするばかりでしたが、3/16～23まで、宮城県（気仙沼、石巻、南三陸町）に後方支援という形で入って惨状を目の当たりにしました。できる限り早く普通に帰れるように、それでも、この災害が風化しないように番組作りができればと思いました。



171	<p>(地震があった) こういうタイミングだからこそ、何が必要(求められていて) 何が不必要(求められていないか) という放送局の編成状況について再考できたと思う。押しつけがましく、下世話なバラエティ番組は、今の世の中に必要なものではないとひしひしと感じた。視聴者やスポンサーに媚びない、メッセージ性を持った骨太の番組作りに今後も取り組みたい。</p>
172	<p>“テレビの力”を再認識する大きなきっかけとなりました。震災直後はツイッターなどのテレビ以外のメディアが情報源として有効だったという話もありますが、やはりニュースで見た“津波が街をのみ込む映像”の衝撃は今でも忘れられません。あの映像や連日放送されるニュースによって日本国民が“今、自分たちに出来る事は何か”を考える大きなキッカケになったと思います。心に訴えるメディアとして、テレビは今でも大きな力を持っていると思います。また、震災直後は自分たちの無力さを感じる事になった。我々、バラエティの人間も1週間、2週間と時が経つにつれ、“久しぶりに笑った”“辛い現実を忘れられた”という視聴者の声を聞き、“バラエティの大切さ”“笑う事の大切さ”を再認識する大きなキッカケとなりました。</p>
173	<p>バラエティ番組の必要性を感じさせられた。確かに非常時であったため、報道が優先される事は十分理解できるが、どの局も同じものを放送しており、マスメディアとしてこれでいいのかと思った。この震災で悲痛な気持ちばかり先行して、前向きに進んでいく気持ちがなかなか生まれないのではないかと考えた。こういう時こそ良質のバラエティを放送し、少しでも気持ちを明るくする事こそが放送局としての役割ではなかったのかと思います。</p>
174	<p>常に報道番組が放送されている中、バラエティで働いている自分が何もできないという無力さを感じた。テレビマンである以上、部の垣根を越えて視聴者に情報を与えていきたかった。</p>
175	<p>バラエティ制作者は無力だと感じていましたが、この現場にいる以上、懸命にバラエティを作ることが一番だと感じました。</p>
176	<p>“AC”という言葉は何度も聴き、ちょっとテレビから目を背向けたくなる日々が続いた(災害報道の惨劇があまりにショックだったため)が、ACに各電力会社の上層部が理事として名を連ねている事にももっと目を背向けたくなくなった。日本人の心が折れた状態で通常の放送も出来る事もなく、一制作者としては次に一体どんな番組作りをすれば良いのかという考える時間だった。レコード会社やアーティストとも話し、これから何ができるのか、話し合うことも多かった。ようやく最近になり、表現の幅が生まれてきたが、震災で受けた人の気持ち、被災した人の気持ちは決して風化させてはならない、できる事はTVを通してやっつけていこうと思っている。</p>

177	<p>テレビの情報の速報性、全国規模、正確さについて、インターネット情報と比べ、これまでの圧倒的優位性が揺らいできたと思います。（速報性）→全メディアだんとつのスピードだと思ってきました。今回ももちろんそうでしたが、想像以上にネットの映像、情報が早く危機感を覚えた。（全国規模）→限られた時間と取材体制の中で行うテレビ放送より投稿といった、質的レベルは低くとも、全国に広がるネットワークはTVでは不可能な規模でした。（正確さ）→これが一番の問題です。取材し、ウラを取り、コンプライアンス面、人権面での配慮をした上でのテレビ放送はこれまでの感覚では正確なものと思ってきましたが、一部インターネットユーザーにとってはほとんど配慮が無いネット情報こそが本物、リアル、不利益情報も出してくれる…という思いを改めて強くさせることになった気がします。問題のない放送内容は特定の視聴者に対してはもの足りない真実を見せないものにとらえられたとすると、大変残念です。</p>
178	<p>有事の際にも、娯楽番組は必要なのだということを改めて実感した。「不謹慎」という概念も立場によって大きく変わるので一部の目立つ意見を真に受けても仕方ないと思った。</p>
179	<p>ショック映像の繰り返しはやるべきではなかった。</p>
180	<p>避難所の取材にも行きましたが、ニュースはNHKがプレゼントしてくれたというテレビで起床～消灯時間、ずっとついていました。それとは別に好きな番組を見られるテレビがあり、そこではみなさんバラエティを見ていました。ニュースはニュース番組としての役割を果たし、極端に言えばNHKに取材力（特に東北地方の記者の数など、民放の倍以上いるらしい）はかなわないので、ある程度、ニュース面はNHKに任せて、民放は民放らしく、番組作りをした方が良いと思いました。震災後の一時期、CXの数字が平時に比べ、下がりました。それは、普段、笑いを求めてCXを見ている人が、あの時期の関心が震災情報に向いたからではないかと思います。CXだけでなく、バラエティ番組が浅い取材で震災のことをとりあげても、ひやかしに見えてしまうのかもしれませんが、SPOTも全てACになり、テレビを見るのが、特にお笑いを見るのが申し訳ないような気持ちになる時期はありました。テレビはあの時期はああするしかなかったと思いますし、タレントの力をかりて、正しい働きをしたのではないかと考えています。全てはこの後、今回の経験を活かすことだと思います。</p>
181	<p>こういう時はやはりテレビの果たす役割は大きいなあと。バラエティが放送されなかったのは、まあ致し方ないことだと思います。その後、しばらく続いた過剰な自粛はどうかと思いました。メディアの多様化と言われていますが、テレビの存在意義を再認識させられた出来ごとだったように思います。</p>
182	<p>今回の大震災のような有事の際、放送局は採算度外視（ノーCM）の報道体制をとる。これは、放送局が本来持つ公共性を考えれば当然のことである。一方で、被災地に各キー局ごとのヘリコプターが現われて、救助活動の邪魔になった、どこのチャンネルをひねっても同じことをやっていて、必要な情報が手に入らないという批判もあった。どうせ採算度外視でやるならば、民放各局が事前に「有事の際の報道協定」を結んでおいて、共同取材体制やチャンネルごとの役割分担を決めておいた方が良いのではないかと感じた。</p>

183	<p>何が実際に起こっているのかを正確に理解しておかなければいけないと思う。この大きな出来事によって、世の中の人達の気持ちや考え方がどう変わったかをちゃんと知り、今、みなさんは何を必要としているのかを見極め、それに答える番組作りを行っていかねばならないと感じた。世間の感情の変化に取り残されない様に。</p>
184	<p>東日本大震災直後、考えさせられたのは「テレビ」の本来の役割とは何かということである。テレビが商売というカタチを取り始めて約 60 年、今となってはテレビは本来の目的を果たすためではない方向に進んでいる番組が多く見受けられているのかもしれない。「国全体的な非常時」であったからこそ、気づかされた。「テレビ」というモノの意味、役割、目的を再考し、原点回帰する（奇しくも）素晴らしい機会となってしまった東日本大震災。商業主義に偏った私たちテレビ人に対する警戒に気がつき、本質を見つめ直すことこそが現代のテレビ人の使命であるように感じる。</p>
185	<p>仕方ないことだと思います。ただ、もう少し報道という意味でも何か伝える方法がなかったのかと思います。被災者の気持ちを考えるとどうしても控えめな偽善的なものになるのは仕方ないにしてもです。その具体策は正直思いつきませんが、辛い時こそ元気を与えることのできる存在がテレビだと思います。</p>
186	<p>バラエティ番組の制作者は、今回の様な緊急事態では、非常に無力であると感じた。通常の番組が再開されても、どの程度内容に配慮すべきか…現在でもそういった状況下で日々悩みながら番組制作をしている。また、以前の様な番組作りができる日がくるのだろうか？</p>
187	<p>テレビの存在価値を改めて感じた。緊急時には速報。そして少し落ち着いてからは人々の気持ちをリラックスさせたり、安心させたり、笑いを届けたりといった娯楽的な面。今後もこの幅広いメディアを大切にしていきたいと思います。</p>
188	<p>私の個人的な思いとしてはバラエティ番組の作り手側として、自分の持ち場を離れず、有事の際も通常の放送に戻る来たるべき日にむかって備えようと思っていました。非常に厳しい映像が何日にもわたって放送されている中、必ず元のような番組が必要とされると思ったからです。最初のうちは報道やその他の部署のように直接的に人の役に立てないことにふがいなさを感じていましたが、「笑い」や「日常の表情」などを視聴者の方々に届けることがどれだけ大切なことかがわかりました。</p>
189	<p>緊急時こそテレビが重要な役割を持つということを実感した期間だったと思う。携帯やインターネットがつながらず、街頭のテレビや大型ビジョン前に群を成している人々を見て、テレビの持つ役割を大きく感じた。それ故に、AC が大量放送されたり、放送でミスがあると余計に目だってしまったように思える。良くも悪くも“テレビ”というメディアの強さと弱さを見ることができた。</p>
190	<p>観たいモノ、欲しい情報を迅速にかつ速時的に伝えられるのがテレビの第一義のひとつであるはずなのに、「被災地が欲しい情報」の観点から考えると、民放各局は「他局との差異をいかに出すか」に終始して、発信するモノはとてわかりづらかった。各局連携をとれるようにしておくべきだと思った。通常放送への切り替えも足並みを揃えるべきだと思った。</p>

191	地震発生後、レギュラー編成復帰の時期やそのトーンを巡り、日々右往左往していた。現場としては、より良い番組を作り続けるため、そのような枠組み決定は素早く、ブレずに行っていた。
192	被災者が求めるものは刻一刻と変化していく。多くの人々の安否が不明になった今回の震災などでは、プライバシーに優先して、無事だった方々の顔を写すことにより、「無事情報」を出すべきではなかったかと思う。
193	バラエティは無力であると強く痛感。しかしながら、その中で自分たちに出来る事は…と考えました。当時は必要とされていたのが情報でしたので、正確なニュースを流すことが報道局の使命だと思います。しかし、たった2週間で元に戻すことは果たしてどうなんだろうとも考えます。せめてあと1週間はニュースを続けるべきだったのではと思います。
194	こういう時にこそ、制作者として何が出来るか考え抜き、国家・国民のためになる番組を作るべきであると考えている。どんな部局であれ、報道機関に身を置く者としての責任がある。国民が良い方向に向くように、最大限の努力をして、良質で効果的な番組を提供しなければ、テレビはそっぽを向かれて、顧みられなくなる。震災以降、難しいが非常に意味のある時間を過ごしている。(制作者として)
195	報道番組を中心とした「情報」が必要とされていた中でバラエティ番組を再開する時には確かに葛藤があった。その時の「バラエティも必要」「楽しかった」「明るくなった」などの声が励みになった。
196	テレビ局が特に原発事故において、政府・東電発表をたれ流し続けたこと。当時の政府・東電が言っていた「安全」をそのまま放送し続けた放送局はその後相次ぐ事態の深刻さを見る限り、「誤報」を犯してしまったのではないかと。本来、権力のチェック機構であるはずのメディアとしての役割をほとんど果たせなかったのではないかと。それは今も。50、60代の人達は今回の震災でも新聞、テレビの情報をかなり信じていたようだが、若い世代はネットや週刊誌などで独自の情報を入手していた。それはテレビや新聞が信用できなかったから。今回の震災で、テレビのメディアとしての衰退スピードはより早まったと考える。今、早急に検討しなければならないのはこうしたテレビ局の報道等に関する根本的問題の方ではないでしょうか。
197	バラエティ番組他、法令順守に関しては、画一的な規制の方向となると、一方向を向いて、事業一丸となってなどとスローガンを立てるのに対し、かたや震災報道については、事業一丸という形をとらず、各局スクープ争いの旧来の陋習のままだったと思います。こういうときこそ、局の壁を越えて、共同取材体制と取材対象の担当分けなど、業界一丸となる体制をとるべきだったと思います。
198	どこよりも早く、どこよりも正確に情報を流すことに全局が集中してしまったので、皆、同じような内容になってしまった。果たしてこれで良いのか？もっと協力体制をとることは出来なかったのか。バラエティ番組の復帰についてもお互いに様子見状態、放送することで視聴者から強いおしかりを受けたケースもあるが、“待ってましたよ”の声も…。純粋な笑いを提供するのもテレビ局の役割の一つだったのではないかと。

199	今回の非常時には情報を伝えるという意味でのマスコミの役割が第一義的に重要なものであることを再認識したものの、少し時間が経過するとやはり娯楽としてのテレビがいかに重要か、ということ改めて感じた。
200	最近テレビを信用してないんだなーと感じた。今回の震災、特に福島の記事は比較的公正で冷静かつ社会の反響までも考えた報道がなされていたと思う。しかし、インターネット、ツイッター、ブログなどのジャンク情報が世論を大きく混乱させていたように思う。テレビを信用しないのか？と問いかけたくなかったが、それぞれメディアとしての地位が低下しているのか…と感じた。テレビ、がんばれ！！
201	テレビ以外での情報取得手段が増えた事で、以前より格段に積極的に視聴者が敏感だったのを感じました。他メディアと比較してテレビ報道の役割が正しいものであったかどうかの検証の必要はあると思います。
202	緊急報道特番も大切だと思いましたが、復興を応援する様な番組をもっと作った方が良いのではないかと思います。各局、あまりにも少なすぎたので…。
203	日頃、放送している内容に「不謹慎」で「自粛すべきもの」が如何に多いのかという事を思い知らされる一方で、広告収入の大切さ、広告に依拠せざるを得ない民間放送局の立ち位置を切に感じた。
204	トークバラエティ担当の部署なので、番組が休止になり、テレビが機能すべき場面でむしろいつもより暇になった。自分たちなりにできることは何か考えた。事後数日は各局ほぼ同じ内容が重なっていた。各局間の話し合いなどで役割を分けるなどできたのではないかと思います（ex、ある局はニュース映像、ある局は安否情報などという具合に）。
205	災害映像だけでなく、被災者が必要な情報をもっと出すべき。今回はしばらくインパクトの強い映像ばかりに偏っていた気がします。
206	国営ではなく、民間放送としての責務をまっとうできたのかは正直なところ、自信がありません。正確な情報を伝える事は大事だと思うものの、下手に同じ事を繰り返してかえって視聴者の不安をおおってしまったのではないかと思います。ああいった非常事態の際の対応もこれからはごく大切になってくるのではないのでしょうか（民放として）。
207	視聴者の方が非常時に放送を頼りにする、あるいは“こうしてほしい”という思いが強いということを実感しました。あと、どんなに心がけていても非常時にどれだけ対応できるかは常時の努力の反映じゃないかと思います。
208	バラエティ番組を自粛する期間は自分が思う以上に世間は退屈だったのではないかと。辛い時期こそ笑いや幸せな気持ちになる番組が必要とされていたように思う。自分は10日間以上はバラエティ番組は自粛すべきと考えていたが、世間は1週間足らずでバラエティ番組を求め、実際視聴率も自分の予想以上に高かった。

209	各局、横並びの報道には違和感があった。局ごとに地域を割り振っても良かったのでは。他の産業が休戦協定を結んだように、協力し合っているのにテレビ、新聞はその様子を報道しつつも“灯台もと暗し”の印象だった。節電が叫ばれる中、一般視聴者からすると「同じ報道するなら一局休め」と言う気分だったのでは…。価値観が大きく変わったので、それに対応しなければいけないと思う。
210	全局同じことをやっていた。本当に世の中に貢献したいなら各局で情報のすみわけとかしても面白かったのではないかな…。〇〇を知りたい人はNHK。〇〇を知りたい人はTBSみたいな。
211	報道に関しては大変な現場に実際に乗り込んで行き、大変な思いをして、同僚として感慨深いものがあった。ただ、放送のあり方としては、毎日の様に不安を助長される思いで、ある時からわざとテレビをつけない様にした。通常の放送に戻ってからは、各局で東北大震災をしのぶ様な音楽番組等がしばしば放送されていたが、視聴率は全て最悪。やはり、視聴者は明るく笑ってテレビから元気をもらいたかったのだと改めて思い、自分の担う仕事の重要さと責任をつくづく感じた。
212	自分が携わっている番組は幸いにして非常時でありながらも、放送倫理的に見て、問題のない放送内容のものばかりであった。しかしながら、被災した人はもちろん、同じ日本国民として、TVを見る視聴者にどんな番組を提供すべきか？どんな配慮をすべきか？を大変短い期間で考えたのも事実。この震災がTVにとって大きな転機にもなったと思えるし、TVマンとして、リセットし、もう一度戦っていくきっかけにもなった。
213	局ごとに役割を分担したら良いと思う。政府、東電に対しては通常の取材をした上ではありますが。震災報道競争は見ていてウンザリさせられた。将来の為に今から可能性を探っても良いのでは？一方で通常のプログラムが安心感を与えてくれる事があった。CMも同様であると思います。
214	緊急体制だったこともあり、悲惨な状況や原発の状況をより早く伝える使命がTVにあるとは思ったが、全局で数日間、暗い情報ばかり流し、それに浸っていたせいで精神的ダメージをくらった気がする。そういった意味でもTVは影響力が大きい。
215	震災以降、視聴者が求めている番組の傾向が変わったように思われる。軽薄な番組は敬遠されるようになったと思うので、より中身の詰まったバラエティを作るべきだと思う。
216	地震直後、また福島原発の事故発生後はやはり、テレビの速報性と映像の力は電力がストップしたとしても、やはり最強のメディアであることが証明されたと思う。被災した方々に健全な娯楽を届けることができるテレビの有用性は、再確認できた。通常放送の移行も大きな反感も持たれずスムーズだった。
217	仕方がないと言ってしまっただけはそれまでだが、逆に安全面でのシミュレーションにはなった部分がある。関東でもかなりの影響があったため、災害に対する備えをスタジオ・ロケを問わず、しようという気運が高まったのは良い事だと思う。ただ、原発事故に関しては、本当はすごい事なのになぜか何事もなかった様になっていて、これで良いのか？という思いがある。未だ解決への道筋が見えていないのに制作者としてどうなのだろうか？

218	テレビと世の中との寄り添い方はいかにあるべきかを改めて考えさせられる機会であった。
219	東日本大震災は大変な災害で、その復興は日本全体で取り組まないといけない問題だと思う。しかし、非常時だからといって地上波全てで放送しなければいけなかったのだろうか？さらに言えば、東京の人の視点を中心に放送されていたのではないだろうか？視聴者のニーズにあった放送、視聴者に選択権のある放送はできなかったのだろうか？南日本の人たちはきっとそれほど震災に関してシンパシーはないでしょう。東日本の人たちにとっては深刻でしょう。関東の人たちにとっては福島原発の影響や物資の欠乏や電気のことがメインの気がかりでしょう。そういう人たち全てのニーズを満たす放送は不可能だし、非常時だからと放送された中身は東京の人の視点偏重だったと思う。非常時こそ民放各局の役割を分担し、特色づくりをするべきだと考える。
220	大災害ゆえ、正確で迅速な報道は必要であるが、各局横並びでの報道はどうかとも感じられる。被災者への配慮は十分した上で、お笑い番組、歌番組への移行はもう少し早い時期でも良かったのではと思う。特に民放は…。
221	震災のような時こそ、たくさんの人達に発信している自分たちの仕事の影響力の強さをはっきりと認識できた。
222	正直、今は何も思うところはありません。少し時間がかかると思います。
223	緊急時の報道は、テレビ局にとってなくてはならないものだと思います。より早く、正確な情報を伝える大切なものだと思います。一方で、これは平和な状況になってからでかまわないのですが、その緊急時に放送される予定のものが中止されているソフトに対して、手厚いフォローがあってもいいと思います。今はしょうがないとなしくずし感を感じます。
224	こうした時こそ、放送に携わる者として、社会に果たすべき役割りの意味、重要性を感じました。日々の仕事の中で、自分達の仕事がこの社会にどんな働きが出来るか、常に考え続けなければと思います。
225	「この非常時に」という雰囲気は支配的となる一方、時局便乗する輩も続出した。戦時中の「流れに逆らえない」とはこういう時かと改めて痛感した。
226	報道ニュースばかりを流すのではなく、番組毎に出演者からの応援スポットを作るなど、局発信の何かが出来れば良かったと思う。
227	被害状況が明らかになるにつれ、報道を中心とした体制は止むを得なかったとの思いが更に強まっていった。しかし、通常放送に戻ったあとや、放送予定であったものの、内容を変更したり、訂正したりもしくは中止したり…ということには違和感を感じた。自分自身の番組もいくつか修正をせざるを得なかったが、こちらの感覚よりも過剰に対応していると思った（編成、営業が）。意見や批判と向き合う以前に、そういったものがこないように進めている。また、抗議の件数などにも敏感になりすぎ。結果、個性的でないものを増やしている。このままだとTVはほろびます。

228	<p>「今、エンターテインメントの番組を制作していいのだろうか？」発生直後から、この思いが大きく心にのしかかっていった。もっと他にやれること、やるべきことがあるのではないか…。焦りにも似たこの思いは今もなお完全に消えたわけではない。ただ、我々が作った番組を見ることで被災された方々が少しでも癒されたり、元気になるのなら…やはりテレビ番組を制作することも、誰かのお役に立てる、大切な行為なのだとは思う。人はパンと水だけでは生きていくことはできない生き物だから。3/11を境に日本人の価値感や物事の捉え方に大きな変化が生じている様に思う。この変化を真摯に受け止めた上で、「番組を作ることができる」という日常のありがたさを忘れずに、番組作りに励んでいきたい。</p>
229	<p>大惨事の場合、今そこで起こっている事を早く正確に伝えるのはもちろんですが、テレビの持つパワーはそれだけでは生かしきれてない気がします。各局が〇〇プロジェクトなどと募金やらしていますが、こういった場合、それぞれの利益を外して考えるなら“大連立”してもいいのではと考えます。①④⑥⑧⑩⑫が横一線で被災者の方に一番必要な情報を届ける。シキリは難しいかもしれませんが、政治家にできない事をTVはやれるという気がまえを持って、せめて議論だけでもスタートさせてはいかがでしょうか？</p>
230	<p>それぞれが放送人としてそれぞれの立場でなすべき事出来る事を一生けん命に考えた日々であったと実感した。また、報道の実力不足（能力というより、公的機関の発表に頼らざるを得ないもろさ）に直面した瞬間であったと思う。ドラマの人間としては、視聴者の感情の変化をずっと考えていた。娯楽は、心の栄養であるというのは自分の放送人としての哲学であり、平和な時には多少の毒が非常時には多くの薬となるようなプログラムを提供できたらと考えた。報道、情報のサポートとして、何かしらできる事があれば、とも考えたが「何もしない」「必要な物を報道に集中させる」という事に協力する、ということに戸惑った。被災時である事実はずっと続いている。しばらくドラマ作りにおいて、その事実を踏まえた番組作りを心がける。</p>
231	<p>今、これを放送して良いのか？この状況で震災前に創った構成で放送して良いのか？本当に…色んな一瞬一瞬の判断が問われ…キツイ時期でした。局としての方針が出ず、各プロデューサーの良識に任せるスタンスが少しだけ信じられませんでした。</p>
232	<p>ドラマ畑の僕はテレビマンとして何か役に立てなかったのかを今でも考える。報道、情報のスタッフは忙しい日々だったと思うが、制作畑は無力感でいっぱいだったと思う。僕にできる事は今後にあるのかもしれないが、あの日の事は忘れられない。</p>
233	<p>①テレビメディアの必要性、重要性が再認識された。②同内容が多いという批判もあったが、新聞は何紙もとる訳にはいかないが、テレビで多様な学者からの観点を聞けて、視聴者にはプラスになったと思う。③その後の被災地レポートも、各局が競争することによって、あまり取りあげられていない地域にもスポットがあたった（浦安、いわき市など）娯楽番組で似たような番組が多いという批判はあろうが、震災報道としては多様性があったことは報道機関としての役割を果たしたと思う。</p>
234	<p>被災した方々の心の支えにTVはならなくてははいけない。</p>



235	ACのCMを流すなら、その代わりに被災地の安否情報、ビデオメッセージを流せば良いのとは感じた。
236	外にいたのだが情報を得ようとして、すぐに見たのがワンセグだった。刻々と変わる状況を生中継映像がまざまざと伝える様子にテレビは絶対かかせないメディアだと確信した。プロデュースしていた番組が「社会不安」をテーマにしていたドラマだったため、局の判断で放送中止となった。他のドラマも放送するのかもしれないのか、厳しい現実を前に判断しかねる時期が長く続いたように思う。つくづくエンタテインメントは「平和」の上に成り立つのだと思った次第。この震災で、人の価値観が変わると思う。自分自身も変わった。ドラマは1年位を見越してつくっているが、人々の変化を肌で感じながら、読みながら作る必要があり、現在、模索の日々が続いている。
237	各局、似たようなずっと同じテンションで番組もCMも流れていて、視聴者にとってストレスをかなり与えていたように感じられました。緊急時だからこそその少し息抜きのできる場も、バランスをとって作るべきだったのではと思います。
238	ドラマとは人を幸せにするコンテンツ、元気を出してもらおうコンテンツと思って携わってきました。震災直後、スタッフから「今、ドラマを作る（ロケなど）をしている場合なんだろうか」という声の一部あがりましたが、直後だからこそ、少し先になるかもしれないが、みんなを幸せに元気にさせるコンテンツを必ず放送するのだという使命感を持ち、そのことをロケ先などにも理解してもらいながら、我々の使命を貫く重要性をあらためて感じた次第です。
239	緊急時には、CMとかお金とかは関係なく、今、現在の状況を的確に伝える必要があると思います。しかし、視聴習慣が低く、こんな時も視聴率が低いのはダメだなと思いました。非常時こそ、力が出せないと思います。

フジテレビ(56名)	
240	NHKだけが地震報道をし、民放は通常放送をしていけば良いと思う。子供などテレビが観れないことでストレスがたまったという事実もあったので。
241	各局で同じニュースを流す必要があるのかと思いながらテレビを見ていた。
242	NHK、民放各局が全部足並みをそろえて、報道番組を放送する意味が、正直わからない。情報を伝えることは大切なことであることは、重々承知しているが、悲惨な映像を繰り返し流すことは何か違う気がした。実際、仙台の友人からは、「身なりを整えたキー局のキャスターが仙台にやってきて、どや顔でレポートしてるのは、怒りすら覚えた」とメールを頂いたことがあった。間違っただけの行きすぎた取材は、歪んだヒロイズムを見させられる気分であった。誰からも「報道してくれてありがとう」は聞かなかったが、テレビ東京がいち早くアニメ『テガミバチ』を放送したことをツイッター上では賞賛のつぶやきが散見された。情報を伝えることも大事だが、楽しんでもらうこともテレビの大事な使命、だとするならば、こういった大災害の下でも安易な緊急報道態勢を取るだけでなく、他の手段で人の助けになることを考えるべきなのではないか？と痛感しました。

243	人間の感情は様々であり、個別に向きあうことへの限界をつくづく感じた。こうした時には国として、局としてといった英断が非常に重要だと思った。メッセージとは誰に向かって発するモノかという点につき、大いに考えさせられた。
244	安全な報道一色の体制を望む声と、バラエティ番組等の早期再開を望む声と両方聞く機会が多かった。同時にそれぞれに対する強烈な批判を聞くことも多かった。それぞれ、現マスメディアの重要な役割であり、生命線であるが、国民がそれを理解してるかに疑問を感じる。伝えきれていない我々にも責任はあるのだろうが、多くの心ない声に落胆もした。なぜ、ここまで言われなくてはならないのか…。が裏返すとそれはテレビに対する期待でもある。今回の震災でテレビがいかに必要とされるメディアなのかがすごく良くわかった気がする。人々の生活に絶対に必要な存在であるという自負と、誇りと、責任を持って今後、番組制作に尽力していきたいと思う。
245	被災された方々が元気になるような番組を作りたいと思いました（普段からそうですが…）。
246	バラエティ番組の制作者として「笑い」の供給のタイミングに悩んだ。今、この状況で、本当に人は笑いたがっているのか？笑えるのか？出した結論は、誰か一人でも笑いを必要としてくれているならば…いや、絶対に必要としているはず…その思いで決して過度な気づかいも演出もなく、いつものように笑いを供給していこうと考え、番組作りをしました。
247	正確で迅速な報道はテレビの使命なので、当然の編成であったと思う。
248	残酷な映像と悲惨な情報ばかりで、ちょっと恐怖を感じる日々であった。バラエティ的のどのような番組が役立っているのかも考えた。自分なりにはとても重要な経験になった。
249	テレビはあくまで、人間の幸福の種であり、報道が優先されるのは当然だと思う。
250	バラエティを作る事に対して、虚無感を覚えた。こんな時に笑いなんて、と思った。バラエティの放送が再開されてからもまだ早いのでは？と思った。そんな時だからこそ、という意見もあると思うが、どうしてもおもしろい事を考えるテンションになれなかった。ここまではダメ、ここからはOKという厳密なラインはないけど、難しい問題だと思った。正解は誰も分からないと思う。
251	通常放送への切り換えのタイミングの難しさを感じました。バラエティ番組の復帰は、クレームも多いですが、確実に視聴率は取っていて、需要の高さを感じました。
252	気にすることは必要ですが、気にしすぎる事はよくない、という事だけです。自分がやれる事をする。それしかないと思います。

253	<p>災害発生直後は仕方ないことだが、いつまでも全局が災害報道していることに疑問を感じた。視聴者が報道以外を観たいと言う感情が高まった時点で、もう少し早めにプログラムを戻せなかったのか。「不謹慎」と言う言葉に怯え過ぎていたように思う。現実的ではないかもしれないが、全局で話し合いある時点から持ち回りにすることは出来ないのかとも思った。バラエティの制作者として直後には自らの無力さを悲観したが、日が経つにつれ、「こんな時だからこそ」と笑顔を提供する仕事に就いていることに喜びを感じた。ACのCMについては良く実状はわからないが、スポンサーがメッセージ性のあるCMをもっと早く製作して放送すれば企業にとっても見る側にとっても良いのでは…と思った。</p>
254	<p>「今までの考え方ではたちゆかない」という思いが強くあります。時代自体が大きなまがり角にあるのは明白であり、当然ながらそこで人々の見るテレビも今後どうしてゆくのかを問われています。ここ数年の「テレビはもう終わった」的な不毛な話しとは全く次元が違う。「今までの日本は終わった」ゆえにさあこれからどうするべきか？という感じです。その中でいかに「楽しいこと」をつくってやってゆくのか、バラエティの仕事。今までの経験や考え方を一回カッコに入れてこの仕事の今後を考えて、そして引きつづきつくってゆきたいと思っています。ちょっとマジメに書いてしまいましたが。</p>
255	<p>他局の動向ばかり気にしてその局の方針がはっきり見えない状況に頼りなさを感じた。</p>
256	<p>通常の番組編成でなかったことは当然で、CMが放送されないことも当然だと思いますが、あんな状況で民放各局が一斉に緊急特番を放送する必要があるのか？被災地の方々はまずNHKを見るでしょう。それ以外の民放局の違いは何でしょう？キャスターやリポーターが独自のスクープをとることばかり、競うよりもこういう時こそ民放各局が力を合わせて助け合い、正しい情報や状況を伝えるべきでは？正直、民放1局だけ放送していればよかったと思います。1日1局を持ち回りでOA。各局ともに、その日はその局の為に取材をする。それでいいのでは…？へりを何台も使うお金があるなら、各局が使うへりのうち1局分だけ取材を使い、残りは救助にまわせたのでは？とにかく今回の報道態勢には不満が残りました。</p>
257	<p>バラエティ番組を制作しているため、自粛ムードの中で、放送を続けるのは非常に難しくなった。しかし、誰も経験したことのない、この緊急事態では、国民の感情に最も配慮しなければならぬ。テレビでは目を背向けたくなる現実がたれ流されている。報道の方々への敬意はもちろんだが、我々にできることは何なのか？を改めて考える重要な時間となった。でも、笑いで人を元気づけられる。これだけはちゃんと証明したい。我々バラエティにたずさわる人間みんなの思いである。</p>
258	<p>責任感を持ちながら、笑いを作ることの難しさは感じました。</p>

259	今回の大震災で、非常時におけるニュースの重要性とそれに反比例するバラエティの無力さを再確認した。バラエティ制作者の中には「こんな時こそ被災者に笑いを」などという意見もあったが、私はそうは思えなかった。実際、私は個人的に被災地を訪れたのだが、その現状を目にし、被災者と接し、とても「今こそ笑いを」などと言えなかった。それほど想像を絶する悲惨な状況であった。例えるなら、家に強盗が入り、全財産を奪われ、家族が殺され、いまだに犯人が捕まっていない状況の人に「今こそ笑いを」と言うようなものである。バラエティ制作者の「笑いで被災者を救う」などという一部の意見は、安全圏に暮らす人間の驕り高ぶり以外の何者でもないのでは、正しい状況認識をして、謙虚に粛々とやるしかないのではと感じた。
260	バラエティ番組の復帰のタイミング
261	放送局としては当然の編成と思われるが、各局とも同じ映像や報道で効果が悪く感じた。あの様な緊急報道の場合、各局が役割を分担して報道すべきと思います。
262	震災時、震災後の視聴率を見て、改めて民放が一般の視聴者の方々に信頼されて必要とされている事を感じました。緊急状態でのテレビの態勢は被害を最小限におさえるためには異常な程、敏感でなければならない事を知りました。そのため、今回日本のテレビ局が取った緊急報道態勢は必要であって、正しかったと思います。M9の震災で、ここまで被害を食い止められた一つの要素は今回テレビ局がとった迅速な緊急報道態勢があげられると思います。
263	放送免許を与えられている企業として当然の対応を取ったと思います。「知る権利」に応える放送だったのではないのでしょうか？また日が経って、ネットには多くのデマが横行することがあることも知り（当然正しい情報もあるのですが、選別する力が働いてはいなかった）放送局には一定の情報選別能力があることも伝わったのではないかと思います。
264	NHK+民放各局が報道特別番組を放送していましたが、限りある情報量の中で、各局が同じ映像を流していることに違和感を感じました。個人的なアイデアですが、緊急時の放送態勢は、NHK+民放一局に制限し、民放5局で被災地の報道を分割担当制にして行うのはいかがでしょうか。各局で担当地区を設定することで、より広域な報道活動を可能にし、情報量も増やせるのではないのでしょうか。
265	暗い時にこそ笑えるバラエティがあってもいいのではと思う反面、仕方のないことだと思う。
266	「悲劇的な状況やそれを被った方々への配慮」と「それはそれとして、前向きに世の中を動かしていく行動」のバランスを取るのが非常に難しいと考えました。そして、“前者への配慮はしすぎるのに越したことはない”と考えられ、“後者の行動はタイミングを見誤ると誹謗、中傷を受ける”ので、前者へのバランス過多を解消するのは不可能に近いとも感じました。
267	被災者が一番どのような情報を欲しがっているか、また、日本国民がどのような情報を欲しがっているかを考えた時、放送局として国民の利益になることを最優先にしているので、当然のことだと思います。また、通常放送に戻すタイミングが非常に難しいと感じました。
268	国民の関心事が報道にある以上、必要なことであった。CMが放送されない事に危機感を感じた。

269	<p>報道（制作）が果たす役割の大きさを感ずると共に、バラエティ（制作）の難しさを痛感した。日が経つごとに“笑い”で日本を明るく！！など銘うってバラエティ番組の放送にふみ切った（各局）と思われませんが、その時期が“今”なのか…。これはテレビ局の（バラエティの）エゴではないかと、割り切れない思いでスタートした自分がいました。未だにあのような未曾有の震災後の対応、テレビマンとしての役割について、何が正解であるのかわかりません。</p>
270	<p>私自身、過去に震災を経験したことがあります。その時、家が壊れ、親戚の家で1カ月間生活していました。今、働いているから言っているわけではありません。当時の私は間違いなく、テレビを見てバラエティ番組を見て、元気づけられました。また、それと同時に不快な思いをすることもあったと思います。今回の東日本大震災の発生以降の「テレビ」は当時よりも（阪神大震災）“デリケート”になっているように思いました。これは、「番組制作者として感じられた思い…」というテーマからはズレているかもしれませんが、個人としてそう思いました。当然、テレビは誰にでも平等に見ることが出来る、楽しむことができる、娯楽であることから、多くの人が見た上で賛否両論あると思います。しかし、それを片方のマイナスの意見のみを参考にした番組作りはもう片方の期待には応えられていないと思います。つまり、“デリケート”になり過ぎていたのではないかと思います。もちろん、最低限の配慮は必要だとは思いますが、辛いこと、悲しいことを忘れたくてテレビを見ている人がいることも忘れてはいけないと思います。個人の1つの団体の片方の意見に影響されすぎる「テレビ」では未来が無いと思います。今回の震災でよりそのように思いました。「時代」という言葉で終わらせたくないと思います。楽しくなければテレビではないと考えます。</p>
271	<p>かつて体験した事のない事態の中で、上記の体制下であったことに異論も反論もない。空気を読みながら制作していかなければならないのは、バラエティの制作者として当然だと思う。</p>
272	<p>制作者としてという以前に、日本に住むひとりの人として、これ程までにテレビをはじめ、ラジオ等、放送にかじりついて見た、聴いたことはないといっても良いと思います。やはり、放送は非常時で情報を得るために無くてはならぬものとその存在の大きさを痛感しました。しかし、日数がたっていくうちに、その気持ちが薄らぐ…というか逆にイラ立ちの方が大きくなってきました。“何が本当なのか？”がわからない。そして、もうみせなくてもいいのではないかと思う津波の瞬間の画の繰り返し。現状のマスコミを戦時中の大本営発表と似ると批判する方がいますが、正直、あの時代の方が幸せとも思いました。情報統制はされているかもしれないが、（されていること自体）ほとんどの人が知らなかったわけですから…。今はみんなマスコミの言論や報道の自由を当たり前のもっている中で、真実がわからない、それでイラ立つことも不幸だと思いました。また、子供の頃から大好きで、こういう仕事を選んだきっかけであるバラエティや笑いというものを一瞬ですが、体がまったく欲しくなくなることがあり、これもショックでした。以上、一個人としての感想や思いで、制作者、テレビ局員としての答えや考えをまとめきれていない所が最大の問題かもしれません。</p>

273	事実を伝えなければならないが、連日、衝撃的な映像が TV で映されており、実際に被害にあった方々には辛い日々だったのではないかと思います。もう少し被害者側にも配慮すべきではないかと思います。
274	無力さを感じた。各局、放送する内容を分担分けすべきだと思った。（全ての局が同じ内容を放送していたので）
275	TV は報道あつての TV だと思うのでいいと思う。
276	ドラマ制作をメインに仕事しているので、報道・情報を伝える側としてのマスメディアに属しながらそこに直接的に関わっていけないことにもどかしさを感じた。各局同じ内容のニュースの繰り返しが多すぎるように思った。「NHK、民放それぞれ得意とするジャンルがあるのだから、例えばフジはドラマ、日テレはバラエティ…という風に担当を振り分けてはどうか」という一般視聴者の声をツイッター上などで多く見かけた。業界のルール上、難しいこととは思いますが、今回のような規模の災害の際には期間を区切って特別編成が（民間の調整のもと）取られるような仕組みを作っておくなど、対応を考えるべきだと思う。
277	事態の緊急性やその深刻さを考えれば今回のような放送対応は正しかったと思う。ただ、その一方で報道ではないエンターテインメント、ドラマ、バラエティをどの時期にどのような形で復帰させていくかはもう少し考えられても良いのではないかと。特にドラマは準備に時間がかかり、放送が一ヶ月先でもガソリン不足、ロケ地のキャンセル等、撮影が滞り、ギリギリの制作状況が続いた。しかし、放送近くになるとその時の状況は忘れられ、内容や完成の時期などを細かく注意されるのは不本意である。今後も報道とエンターテインメントのバランスはよく考えてもらいたいと思う。
278	ちょうどまさにクランクイン直前だったので、ドラマ制作者として、本当に悩みました。やるべきなのか？やめるべきなのか？と。会社の判断が「やれ」とのことだったので、やりましたが（スタート日を遅らせることなく）それが正解だったのかどうか、今でもわかりません。倫理的なことはもちろんですが、ロケ場所を確保できなかつたり、ナイトロケを自粛したり、ガソリンが確保できないからロケを近場ですませたり…と。正直、いつものドラマのクオリティを確保できないまま放送してしまったことへの心残りも大きいです。
279	①津波のリアルタイムの映像を TV で見て、映画のワンシーンかのように興奮して観るドラマスタッフの狂気。②地震、原発問題、ガソリン、食料問題がひっばくしている中でもロケを行う狂気。③本当に撮影なんてしていて良いのだろうか…。
280	通常の番組が放送されない状況が続いたのは正しいと思ったが、CM のかわりに AC が大量に流れ続けたのはどうかなと思う。震災発生から数日の準備期間があれば CM 部分を本編にするなど、対応の仕方があったのではないのでしょうか。
281	CM を流せばいいと思う。

282	震災がなかったら、このアンケートの答えも少し違ったような気がしています。テレビの力は低下していると思っていましたが、この事でいかに人々がテレビに頼っているかが良くわかり、責任を感じました。作る番組に対して、責任を持つのは当たり前の事ですが、最近は本当にそう思って作っていない人々が多くなったような気がします。これを機会にあらためてクリエイター一人一人がしっかりと自分の責任で番組を作るような（自分も含めて）環境を作っていきたいと思いました。
283	実際に目の前で起こる事実には勝るものなし。ドラマは今後どうあるべきかを考えていた。
284	止むを得ない事態だったと思う。ただ、データ放送やL字などを活用し、生存者に有意義な情報をなるべく多く提供すべきだと思った。一報以降、死者数より必要な情報は確実に有った。
285	報道の必要な情報が報道されずに、センセーショナルな煽りが目立った。政府に報道規制されすぎだと思った。
286	民放局員として、報道の方法に問題があると強く感じました。あまりに感情的な報道をなんとかしないと日本がおかしくなってしまうと思います。この問題にきちんと向き合い、システムを変えないと数年後には国家的大問題になると思います。
287	世の中が大変なときは、報道番組が重宝されるが、落ち着いたら娯楽が求められる。その為に大変な時でも番組制作をしなくてはならないと強く感じた。しかしながら、ロケをしていると「こんな時に撮影なんてするな！」という一般の方の声を聞くとそれでも宿命として受け入れなくてはならないんだなとも感じた。
288	企業体としての使命かもしれないが、緊急時の報道番組ですら結果、視聴率で評価された。計画停電で世の中が騒動になっている際に、NHK 含む各局の報道内容を“計画的”に局ごとに特化していく的な発想はないかと思った。NHK は全体、日テレは避難所情報、TBS は交通情報など。系列局や様々な条件で見られない方が出る場合等、考慮すべき点はあるが、全局、ヘリを飛ばし、車を出して、同内容をたれ流していた印象がせつかくの苦労を半減させてしまった様に思う。ただ、TV が久しぶりに家族をまとめ、ある安心を与えたことは確か。誇りを持って仕事をしていきたい。
289	ドラマはTVにはかかせないジャンルである。
290	緊急事態において「ドラマ」「バラエティ」は力になれないのかもしれないと思う時もあったが、次第に復興をとげ、被災地に日常生活が戻った日には「ドラマ」「バラエティ」を楽しんでもらえるようにしておきたいと思う。
291	放送局として当然の事です。
292	緊急時こそ必要なのは客観報道ではないか？意図的なお涙ちょうだいが非常にしんどい。
293	必要に応じたタイムテーブルが絶対だと思う。テレビ局として迅速な対応をする事。NHK に負けない放送システム。

294	同じ放送局の人間なのに、ドラマに所属していると被災地や被災者のためにできず、報道の使命や、一テレビ局員としての使命を改めて考えさせられました。こういった状況下において、その時ついている番組を作り続けるしかなかったことはやはりくやしく思いますし、弊社のドラマセクションの柔軟性の欠如を残念に感じました。急きょ被災地に向けた心のあたたまるような単発ドラマを制作する等、ドラマとしてできることを考えることができたのではないかと思います。
295	放送の公共性、社会的責任としてサス（CM無し）で報道を継続することは必要なことだが、「どこがはじめて止めるか」といった「持久戦」のような放送の継続はあまり意味がない。ガソリンの不足やロケ環境の悪化などドラマ制作に多大な影響を与えたが、その中で無理矢理収録を執行した事はドラマのクオリティを下げ、周囲の理解を得られないので、TBS、日本テレビのように収録を中止して、4月新スタートを遅らせるべきだった。ACに差し替えられたが、あまりにも同じ素材がくり返されたため、ノイローゼになりそうになった。無理に流す必要があったのだろうか。他に工夫ができたような気がする。

#### テレビ朝日(64名)

296	必要な情報だったとはいえ、あまりのすさまじい現状を日々放送されるのは正直つらかった。かといって、ドラマやバラエティを流した所で見ようとは思わない。ACのようなCMを流すなら、ニュースの時間を増やした方が良かったと思う。
297	非常時でのテレビ媒体の責務と役割の重要性とその必要性をあらためて認識した。
298	震災が起き、直ちにテレビをつけ、情報を得ようとする者が多く、即時性という意味において、情報源としてのTVの力を改めて思い知った。反面、エンタテインメントの作品に加わる者として、国家の一大事に何の力にもなれない無力感を味わった。エンタテインメント番組の多くが放送延期になり、営業編成の人々が寝る間も惜しみ働いていたが、その調整が実に変なもので、広告収入によるTVの放送という枠組事態が、こういった大事に対して適応力の弱いものだと思った。広告収入による運営と一番大事な報道とは、つきつめるときと相容れないものだという思いがよぎった。
299	過剰にCMがACのCMに差し替えられすぎているように思います。
300	あの状況下でドラマ制作者としてドラマをつくり続けていいのか。つくり続けるとしたら何を伝えればいいのか、とても悩みました。明確な答えは出てませんが、つくり続けることが大事だと思いました。番組を見た人が少しでも元気が出たため、勇気もらったとか、色々考えさせられたとか、楽しい時間を過ごせたとか、その為につくり続けるべきだと。それって番組作りの原点。あたりまえのことを改めて考えるようになりました。
301	私はドラマ担当者ですが、“戦後”の日本を、今、描くように“震災後の日本”を描かなければならない。そのために色々なことを考えました。



302	どこで放送をとめるか、各局がにらみあいをしている状態が終わった。放送局としての責任ある行動としては、放送を流すことよりも、1秒、1分でも状況を伝える事が大事で間違っていないと思う。
303	言い方を選ばずに書けば、視聴者が頭でっかちになっていると感じます。インターネットで様々な情報が氾濫する中で「テレビの言うことをまともに信じてはいけない」というある種の強迫観念が生まれているような気がしています。
304	私はドラマプロデューサーです。大震災の発生後しばらくはドラマの放送が自粛され、緊急の報道番組が放送されていました。テレビの「即時性」を武器にした報道が大半を占めること自体はしごく当たり前のことというか、健全なこととしてとらえていました。津波の爪痕が残る町の映像は我々の想像力をこえた映像であり、ショッキングなものでありました。このような非常時において、ドラマ制作者というものは直接的に何かに関わるというわけにはいかず、少しもどかしい思いをしたことは確かです。取材陣の一員に加わることもできず、やがて放送されるであろうドラマの撮影準備を粛々とこなしていく日々でした。かといって無力感を覚えていたわけではありません。やがて、災害の状況が落ち着き、テレビ放送も通常に戻っていったとき、「フィクション」がチカラを持つことは歴史によって証明されているからです。希望を与えるチカラを持つのはこれまでも、流行歌や映画、コメディアンなどでした。むしろ、我々の出番がやってくるぞ！という強い思いにとらわれたといった方がよいかと思います。以上。
305	民放の性質上 AC の CM は必ずあるわけだがやはりパターンが少なすぎる。緊急時だけでなく、スポンサーの都合が考えられる場合もあるので、AC のパターンは増やした方がいいと思う。
306	ドラマというフィクションを作る上で、非常に難しかった。
307	CM、番組内容が制限されることはやむを得ないと思っていたが、長期間続くと逆に人々に大きな不安感をもたらすことを痛感した。テレビは人々の生活パターンに大きな影響を及ぼす存在であることを再認識し、これからの混乱が続く世の中であって、テレビはますます人々に喜んでもらえる番組を送り出す「夢の箱」でなければと思っている。
308	広告収入の問題ではなく、AC（数パターン）の映像差し替えは安直。同じテレビで放送するものとして表現物が視聴者に与える影響は考えるべき。自粛の基準が定まっていないため、放送局内での混乱が生じた。出演者や、制作スタッフは局をまたぐため、個々の説明では足りない。
309	今回、地震報道を通して、改めて一番信頼できて、信用性の高い情報を一斉に伝えることができるメディアがテレビであることを、再認識しました。テレビの一番の使命である報道の役割をきちんとなしたと思います。結果的に、ドラマ・バラエティ番組の予定されていたものがとんでしまったり延期になってしまいましたが、いたしかたないと思います
310	「ビートたけし」さんが言うように、「安心して寝られる場所がないと笑えない」というコメントの様に、バラエティは大変な痛手を受けました。何か日本社会に対して貢献したい思いと、出来ないことに対して、無力感を感じました。デジタル化に向けての高画質（大画面）テレビで、震災の画を見るのは以前よりもインパクトが大きいと思いました。

311	<p>今までにあまり経験したことのない異常事態ともいえる状況ではあったが、テレビの重要性が再認識された機会ともいえる。テレビ報道が大きな役割を果たした一方でバラエティ番組やCMが自粛されるという、バラエティ番組の制作者としては何ともしがたい状況が続く中、改めて視聴者あつてのテレビ番組であるということを認識させられた。そして、当然のことながらスポンサーの意向も無視できないわけであり、その中で自分たちの意志というものをどこまで反映させられるのか、今後も葛藤していきながら番組を作っていくのだと思う。</p>
312	<p>地震に対する考え方や温度はそれぞれで、どこを基準にするべきか難しかった。地震で会社が神経質になりすぎる面があった。テレビの役割は大きいと思った。…と同時に民放は慈善事業をしているワケではないので、「こういう報道が少ない」とか「もっと〇〇にも目を向けてほしい」とか要求されても全てに応えることはできないし、それでいいと思う。地震以降、国民の好みが変わった。根本的に何故面白いと思われて、何はつまらないのかもっとリサーチしなければ…。</p>
313	<p>やはり情報伝達という最大の役割を果たすものとして、TVが1番であると思う。</p>
314	<p>震災直後から報道特番が生まれ、テレビが報道機関としての役割を久しぶりに発揮できているなど感じた。放送が先送りになったりと、影響のあった番組は対応等が大変であったが、この規模の震災だと仕方が無いと思う。ただし、CMも同じことが言えるのだが、自粛する程度が適切だったのかどうか。被災地の方々はまだ少し娯楽番組も観たかったのではないかと感じてしまった。ある程度の検証が必要であるとは思いますが、個人の意見としては「自粛しすぎたのではないかと」という思いは残った。報道番組の内容としてはどの局も伝えている内容もほぼ同じで飽きてしまうのではないかと感じた。何日か経ってから、行方不明者の発表やその方へ向けたメッセージも放送されはじめたが、「被災者が本当に求めている情報」に特化した番組があっても良かったと思う。</p>
315	<p>各局、報道機関としてのプライドがあるのはわかるが、震災から3日程、CMなしの特別編成で放送している際に思ったことが、民放は放送局をしぼり、協力体制で臨めば良いのではないかと感じた。節電が呼びかけられていた上、人員も協力しながら割くべきだったと思う。バラエティ番組自粛の際も、震災情報ばかりで、気が病んでいた方たちの為に、何らかの形で放送すべきだったようにも思う。</p>
316	<p>震災で沈んだ多くの方の気分を少しでも紛らわせる為にも、自分が制作しているバラエティを通常のスタイルで放送すべきとの考えを持っていましたが、現在ほぼ各局通常のO.A.に戻った今、原発事故などへの意識が低下していると思わざるを得ません。今頃になって“メルトダウン”していたなどと報道されても騒ぎ立てなくなってしまう自分に戸惑いを感じます。</p>

317	<p>実際に起きた災害・被害に対して相応の配慮をするのは当然の措置と認識しているので何の異論もないが、局内の姿勢としてあらゆるリスクへ対処しようとしすぎてるのか、編集内容はもちろん、企画内容への判断が「基本はNG」というやや行き過ぎの感は否めなかった（食はもちろん、使用しているイラストなど含め）。また、そうした姿勢だけが広まることによって、時間が少し経過した今でもいたずらに「NG」と判断する担当者も残る一方である程度本来目指していた方向性に戻すのを容認する人間もいるなど、方針・判断基準が共有されておらずに調整に苦しむことも少なからずある。公共性の高い組織である以上、リスクヘッジの考えは重要ではあるものの限られた予算の中で、やりくりして制作業務を行っている中で、判断は一つ変われば、大きな影響があるので、意思統一・基準が共有されていないことに支障を感じた。</p>
318	<p>こんな時こそ、バラエティ番組で、日本が少しでも笑顔になればいいなあと思いました。</p>
319	<p>何を放送するか、放送にどんな言葉が適切かより慎重に選ぶ必要があった。視聴者のテレビを見る空気が明らかに変わったと思うし、作り手としても変わっていつている。民意の空気みたいなものをより感じながら番組を変化させていると思う。</p>
320	<p>制作した番組が放送されず、むなしさを感じた。もともと、番組なんてはかないものとは認識していたつもりだったが、「放送さえされない」のは制作の苦労を考えると、とても苦しかった。また、テレビの報道姿勢やお涙ちょうだいの報道内容を周囲の人間から意見される事も多く、自分の仕事について考えさせられた。通常時（震災前）よりもテレビのあざとさや日和見主義が色濃く出た気がする。</p>
321	<p>テレビ局員であるなら、バラエティもスポーツも関係なく、全員野球で震災の報道に協力すべきだったと思う。</p>
322	<p>バラエティ番組制作の一員として震災からの数日間は自分の仕事が本来必要のないものなのかもしれないと考える機会になりました。ただ、時間が経ち、以前のような放送に戻っていく中で改めてバラエティ番組の意義、必要性について浮き彫りになったように感じます。寄せられる意見の中には否定的なもの、お怒りの内容もありますが、番組を見て楽しんでくれる視聴者がいる限り、バラエティは新しいものに挑戦して行くべきだと考えています。</p>
323	<p>震災が発生し、被災地ではほとんどテレビが見られない状況になったというのは衝撃だった。停電及び津波の被害は余りにも大きく、まず人間として大きくショックであった。こういう時に情報が伝えられるのがテレビであるのにSNSなどでしか情報が得られないというのはショックであった。しかし一方で、テレビの強さも感じられた。映像が伝えられるという強みは遺憾なく発揮されたし、インターネットでは文字や簡単な映像のみ。被災地以外の方はテレビに釘付けになっていた。だからこそACへの苦情殺到であると思う。テレビが公共放送機関であることが証明されたと思う。</p>

324	自分の場合、準備していた特番の放送が中止となり、多少なりとも生活に影響があったのですが、「そんな場合じゃない」という暗黙の了解は決して間違っていたものではない様に考えておりました。一部で AC の CM が流れすぎて不快に感じた人もいると聞いているが、妙な納得感がありました。被災者に届いたかどうかは別として、「何かできないか？」という思いの受け皿にテレビはなっていたし、やはりそういったものを寄せることのできる無くてはならない存在なのだと感じました。
325	バラエティに対する逆風は想像以上だった。バラエティに何ができるのか考える機会になった。
326	各局それぞれ取材をして番組を放送するのは当然のことだが、同時にもっと協力し合って何かできないものなのかと思った。また、テレビでどんなメッセージを流そうとも肝心の被災地に届かない（停電などで）というのが何とも切なかった。
327	やっぱりテレビは世の中に必要だ。
328	報道機関としてのテレビの重要性を再認識しました。
329	報道機関としては、当然あるべき姿だと思います。画一的な報道になった面は感じますが、各局の判断での放送ですので致し方ないものと思います。
330	やはりインターネットの役割は大きくなってきていると思うが（Twitter など）、テレビの持つ“映像”と我々の情報を伝えるノウハウは、このような緊急態勢下に必要不可欠であり、まだまだテレビは信頼性におけるメディアとして人々の役に立っていると感じた。
331	何故民放各局がこぞって同じ様な内容の報道をしているのかが非常に気になりました。各社の情報を結集して、大型の密な報道番組を全局で流せば良いのにと。広告料のパイを取り合う競争は平常時には最重要な課題だと考えますが、非常時における横並びの結束力があまりにも希薄であると感じました。地上波の存在意義を脅かすメディアは既に外堀を埋めてきているというのに。
332	情報の大切さ。情報を最も得やすい「テレビ」の可能性と責任。
333	放送局としての責任を大きく感じました。全ての CM をカットして、全ての労力を震災報道に向ける点で、「責任」というものを強く感じました。また民放として、CM の広告収入がない中でも放送を続けていくことの難しさも感じました。地震があると、多くの視聴者が NHK にチャンネルを変えることがデータとして理解でき、現在のこの状況を変えて、もっと情報の信頼性、また放送局としての信頼というものを獲得していく必要があるようにも感じました。こういった緊急事態の時こそ、視聴者の本心のようなものが垣間見えたような気がします。報道関係ではありませんが、現状を打開して、より民放に対しての信頼を高めていきたいと思いました。数日間連続でずっと震災報道を続けていて、バラエティ番組のような視聴者に笑いを届ける番組の重要性も強く感じました。震災報道のような現実が起こっていても、あまり見たくない映像を多く流されることで、視聴者もバラエティ番組を欲していたように感じました。日々の面白さや笑いを生むような番組の重要性がすごく分かった時期にあったように思います。

334	<p>バラエティ制作者として日本中が激震する中、いつも通りの笑いを放送することで、世間の見る目に変化している状況下において笑いを提供するのにはアリかナシかと考えた。ただ、どんなに不況だろうが全国的自粛ムードだとしても人は笑えなくなっておしまいだと思ったので、笑えるTVを届ける事は必要であろうという結論に至った。TVは時に必要悪であり、必要善であるべき役割を担っていると考えているので、制作者の作りたいもの（もちろん視聴者が求めているであろう番組を作るべきだが）を放送することで見る人に制作者の思いが自ずと伝わり制作者と視聴者が共に笑いあえればいいなとバラエティ制作者として思います。</p>
335	<p>テレビ番組を作る人間として、何ができるのか、何をしなくてはならないのか、ずっと考えていました。しかし、民放である以上、スポンサーのことも考え、視聴率のことも考え、人間として動くことより組織のことを優先しました。その点、この仕事をして10年以上たったことがそのような判断に至ったのだと、悔しさはありましたが納得していました。そんな自分にやりきれなさを感じています。AC公共広告が通常のCMに代わって放送されるのを見て、民放の収益構造に不安を感じました。震災の直後、その日はこれから「自粛」「自主規制」がはびこるだろうと思いました。その通りになりました。更に、世の中は過剰な方向へエスカレートしていきました。「早く落ち着いて通常の行動をとれるように」願わずにはいられませんでした。</p>
336	<p>被災者配慮という意識が強すぎ。放送局として何を放送したいのかという能動的な意識が薄く、「この内容だったら放送して大丈夫だろう」という観点でばかり番組作りがなされていた。例えば、科学番組の中で、微生物について放送する中に発酵食品の映像があるだけで「食糧危機にある被災者への配慮」ということで放送見送りになったり、視聴者への心理を本当に分析などするわけではなく、単に「事無かれ主義」なだけな気がした。民放である以上（NHKもそうだが）、視聴者が求めるもの、忌み嫌うものを放送することは望ましくないが、単に世間に少しでも叩かれまいという過剰な受け身精神としか思えない。放送人である以上、経営陣も含め「何を放送したいのか」を自信を持って放送すべきだし、またそれが批判されたら真摯に受けとめて改めればよいと思う。資本主義社会の民営企業なのだから、需要がなければつぶればよいだけ。視聴者や世間に対し過剰に萎縮するテレビ局自体、また（CM出稿している）企業、更には、BPO含めそれを助長する現代にテレビという文化の衰退を感じ、またその影響が決して世の中に好ましくないと思う自分にとっては残念でならない。</p>
337	<p>戦争最大とも言える緊急事態であったから、多くの事象は致し方ない。TVのライフラインとしての役割を見直すいい機会となった。</p>

338	自分が所属するバラエティという枠組で「何ができるのか」という無力感を痛切に感じた。「笑い」は非常事態時に「不謹慎」と取られ、自粛ムードが続いた。自分の中では悲しい時こそ「笑い」だと信じていたが、いざ津波で街全体が流される映像を見た後に『アメトーク』を見ても、なぜか素直に心から笑えなかった。これが世の中全体にただよう「雰囲気」なのだとすれば、震災後しばらくは、バラエティにできることは「自粛」しかなく、落ち着いて、人々の心が「笑い」を受け入れるパワーを持ち始めた時に最大限のパフォーマンスを出せるように準備するしかないと思った。この震災を機に何ができるのか、何をすべきかをバラエティの人間として根源的に問い直すことができたのは良い機会だったと思う。
339	震災の映像ベースで、視聴率を競う事にいささかの疑問を感じる。バラエティの立ち位置の弱さを痛感。
340	本当に非常時なのだから、NHKと民放各局が連携をとって作れないものか？と思いました。結局、視聴率をとる争いになるので。こんな時でも、見てもらうためにどうするのか？ってことは意味がない。
341	全局同じことやる必要はないのでは？リレー形式でまわしていくとか広告収入を全局放棄するのはバカみたい。
342	L字にして通常放送をしばらく行っていたが、L字に表示されるテロップの内容がひどかった。中味がなく「とりあえず何か表示させる」といった姿勢に大変疑問を持った。
343	電力が足りないという話になった時、視聴者がテレビ局の数がこんなにいるのかと、本気で思ったりはしないかと不安になった。それだけ、各局同じことを放送していた。各局の個性と役割が問われる瞬間だった。未だに真実を放送できていないメディアに恥ずかしさを感じる。
344	番組制作者として気にしすぎるのとデリカシーの無いこととの狭間で悩ましいことが多々ありました。
345	報道番組しか求められていなかったことに自分の存在意義を否定された思いと共に何も役に立ってない無力感で一杯でした。
346	こういう時こそ元気を与えられる番組が作りたいと思った。
347	スポンサーからお金をもらい、視聴者に番組を提供していく。他の業界とは異なる「いびつなシステム」の限界が露呈した気がします。

348	<p>震災報道一色となった数日間。もちろんそれがテレビという大きなメディアの役割であった。しかし、やはり感じてしまったのは、本来の日常であれば重要であるニュース（政治的決定事項や殺人事件など）がこの期間、ほとんど世に知られることはなく流されていった感があった。被害状況、復旧情報、支援状況や被災者を励ますメッセージなど、放送すべきことが多すぎるのはもったいであると同時にやはり数日経つてくると、こればかりでその他の世情をうやむやにしてよいのかという気にもなってくる。それこそ凄惨な映像ばかりではなく、通常編成の番組を見て和みたいという人もいないかと心配になった。テレビの放送ができるのは1日に24時間。時間的に限りあるメディアである分、何かを足せば、何かを削られてしまうという弱点を大いに実感したのが今回であった。この度の震災で大きく活躍し、その存在をアピールすることになったのがツイッター、mixi、facebookなどのITネットワーク。マスでありコアであるメディア。その即時性や波及性、情報量において良くも悪くもメディアとしてのパワーを見せつけられた。テレビというメディアは圧倒的な取材力や制作力で、情報の信憑性やクオリティーを保つ役割がある。しかし一方で、時間や情報量の制限という点などでの補いきれない弱点もある。このようなメディアが今後テレビの弱点を補完し、役割分担を明確にしていくであろうし、一方でテレビと連動しながら新しい形態を模索していくことの重要性も感じた。これは報道のみならず、その他の情報番組、バラエティ番組の制作においても同様であると思った。</p>
349	<p>報道機関に身を置く立場としては、当然のことと考えます。</p>
350	<p>緊迫した状態であったが、あえてレギュラー番組や通常CMなどを流してもよかったのではないかと。子供や女性は、恐怖心にとりつかれている人が多く少しでも、いつものバラエティやアニメなどでリラックスさせられたと思うので。CMもACの公共広告だけではなく、もっと違うメッセージのものを放送してもよかったのではないだろうか。例えば、連絡のとれなくなった被災者の呼びかけ、元気のでる音楽を30秒流すだけとかもう少し多様な表現があっても良かったのでは。</p>

351	<p>バラエティをやっている場合なのかという疑念を抱くようになった。世の中に求められているものと今現場でやらなきゃいけない番組のギャップを感じる。「激安グルメ」「最新便利グッズ」「人気食品メーカーの工場」etc…。そういったキーワードで過剰に消費をあおる企画が自分の番組以外にも各局で目立つようになってきている昨今だが、今の国民が求めているのは震災に関する正しい情報、あの悲劇を忘れず、日常の大切さを再認識させてくれるためのありのままの記録、負けの中から明日立ち上がろうとする活力であると感じている。一方、今の情報バラエティ全盛のバラエティ番組にはそういった魂が全くない。あるいは、「100円ショップなら数字を取れる」「～みたいなパッケージで情報を見せよう」という高給取りのエリート局員が世の中の“諸民”を手のひらでころがそうとするあざとさ、惑いは世間を無視したテレビ村内での横並び意識だけである。かつてお笑い番組のように批判覚悟で自分たちが笑えると思ったものを貫き通し、暗い時代に笑いを提供しようという魂もない。今の時代に対し何もバリューのないスカスカなものを5局のリーグ戦で勝つためだけにひたすらあらゆる犠牲をスタッフ一人ひとりが払い作らされているだけの虚構である事が分かってしまった。今の地上波バラエティは虚構である。地上波の存在意義は今後ニュースとスポーツに集約されていくと思う。良いコンテンツは地盤がニッチな所でもカルチャーをけん引できる時代になってきた。魂のある娯楽は今後CSやネットなどに集まるようになっていくだろうと日々感じている。</p>
352	<p>私はまだ入社前でしたので、内部の状況というのは分かりませんが、少しだけ、ほんの少しだけ、音楽一曲でもTVから流れてほしかったような気がしています。どちらにせよ、放送局に何ができるのかというのが本当に試されるのは次回の大震災の時です。その日のために、今回の反省は、してもしたりないと思います。報道だけでなく、TV局全体として何ができたか、しっかり考えなければと思います。</p>
353	<p>各局がほぼ同じ様な情報体制だったので、NHK→全般、NTV→原発関連、TBS→東北メイン、EX→伝言、CX→バラエティ、TX→関東情報などと、分担して放送したほうがよかったのではなかろうか？バラエティも必要だったと思う。</p>
354	<p>各局のバラエティ再開のタイミングがそれぞれでした。探り合いの空気があり、正直くだらなと思った。こういう時こそ、各局持ちまわり等で乗り切るべきだと思った。無理矢理放送する必要はない！！</p>
355	<p>バラエティは震災の前では無力と感じたが、3日ほど経ち、バラエティが復活した時に数字が良いのを受けて「やはりバラエティは必要だ」と感じた。</p>



356	被災地の方の役に立つ情報を発信している局がNHKのみだった（他民放はあくまで被災地以外の人への知識・用語の説明などに終始）。当時、「報道バラエティ」と言われるような種類の番組を担当していたが、5週連続3時間の生放送というあまりに無理なプログラムの組み方に「こんな時にも視聴率がとりたいのかな」とうがった見方を編成に対して思ってしまった。毎度毎度の「被災者の方へのデリカシーのない質問、インタビュー」に多くのクレームが寄せられているのを見て、なぜ修正できないの？と思った。一視聴者としても「ご家族は見つかりましたか？」などのインタビューは痛々しくて見てもらえない。もっと早くバラエティを放送してもよかったと思う。
357	バラエティ番組の自粛等、多くの影響を被ったがテレビの果たす役割として真実を伝えることの大切さを大いに知った出来事となった。この経験をふまえ、今後の番組作りに生かしたい。
358	今回の震災はそのレベル、被害の甚大さから改めて“自分たちの作った番組は今どう受け入れられるのか”を考えさせるものだった。被災者への配慮は当然としても、「おなかいっぱい食べておいしいと言う場面」すら不謹慎と言われるような状況が続き、楽しい番組、笑えるバラエティを作ることが憚られるような空気を感じた。各局が横並びで同じ様な映像、情報を流し続ける中、いち早く通常編成に戻したテレビ東京がうらやましかった。
359	無責任な内容は放送できないと痛感した。しかし、G帯と深夜は違う価値観で編成しても良いと思った。あまりに一辺倒な方向性で恐いとさえ思った。

テレビ東京(56名)	
360	被害があった場所以外にも影響は多大にあり、テレビ局全体としても、被害のほどは大きかった。今現在起きていることをリアルタイムで見せることももちろんだが全局同じことを伝えていても意味はあるのか考えさせられた。バラエティ番組であってもロケができない、OA日程を変更しなければならないなど大変苦労した。また、原発の問題など特筆すべき進捗がなくなると情報としてだんだん放送しなくなるのはどうかと思う。原発事故から2ヶ月経って詳しく現状を伝える番組がないのは同じ放送局で働く人間として少し残念であり、誠実さが欠けていると思う。
361	結果として、あまり真実が初期報道で伝えられていなかった事は非常に問題があると思う。
362	NHK教育が被災者の伝言板的な役割を担っていたように、民放各局もそれぞれの色が出せればと感じた。同じ様な内容や映像が続いた為、視聴者のトラウマ発生の問題も起きたので。
363	会社として、テレビ局としてのコンセンサスがないうまくなく自主規制、自粛の空気になる主体性のなさはおかしい気がする。
364	広告を自粛するのはナンセンスだと思う。制作であっても震災関連の内容を報道したいが、リスク回避や批判回避できていない面が多いと思う。テレビ東京は報道の取材力やメッセージ性がないことを痛感した。
365	NHKの報道がより信頼性が高いという実感を改めて感じた。民放は状況に応じてレギュラー通りの放送をしたほうが有益ではないか。

366	世の中のニーズも報道だったので、このような状況になったのは当然。震災に対応するため、番組内容の変更や作り直しに迫られたが当然の事だと思う。
367	緊急時にバラエティ番組を担当する者としてどう動けばよいのか分かりませんでした。あの時テレビが必要な情報を必要な人に伝えることができていたか疑問に思います。
368	番組制作者として、テレビは地震予測、震災後の状況などといった視聴者にプラスの情報を与えていた。テレビは地震が起こるかもしれない震災でこんなたくさんの方が悲しんでいる、などといった視聴者にマイナスの情報を与えていた。テレビニュースの信頼度はNHKが一番高いことがよくわかった。どこの局も似たような場所に行き、似たような報道をしており、とてももったいなく感じた。報道機関ごとに取材地域を分け、手分けして取材、報道を行った方が視聴者に与える情報は多くなり、報道関係者の負担も減ったと思う。今後に備え、新聞・通信・素人・フリー・放送などの枠を越えた協力機関・連絡システムを整備すべき。
369	何でも自粛するモードにはこれでいいのかと自問自答したが被災された方に気をつかいながらも全ての笑いにまつわるものの自粛はすべきでないと考えていた。しかし、組織的なジャッジではやはりやめていこうというムードに追いやられ事なかれの的に自粛を選んだのは非常に残念であった。
370	無力感がある。
371	自分はバラエティ中心に制作しているので、その難しさや無力さを痛感した。本来、ある意味「不謹慎」なるがゆえに、笑いをとる存在を扱う番組そのものが問われた。つまり、やりようがなかった。視聴者の存在を非常に近く感じる事ができた。とはいえ放送する側が視聴者のナーバスな感情を強く意識しすぎるのはナンセンス。本来あるべきエンターテイメントをしっかりと築くことが使命だと思っている。
372	事実の報道は必要不可欠であるが、民放全局が長時間同じような内容を放送することにはあまり意味がないと感じた。内容は考慮に入れるとしても、違う番組を放送することも放送局の役割なのではないかと思う。
373	非常時にニュースや生活情報が優先されるのは当然です。しかし、各局の情報がにかよりすぎて視聴者に本当に役立ったのかは疑問です。
374	テレビの力とは何か…を考えさせられました。
375	地震発生直後からすぐに緊急特番を放送し、津波の状況をリアルタイムでOAするなど、テレビの即時性や瞬発力を改めて感じた。一方で、民放は広告収入で利益を得ているので、視聴者に有益な情報を流せば流すほど、赤字が膨らむという状況が生まれることに違和感を感じた。
376	まだ何とも言えません。あおりすぎている印象もありますし、横並びで同じ内容を放送していた印象もあります。それならば通常放送で良かった気もしますが反感を買う可能性もあったと思います。事態が収束しない限り、あの時こうすべきだったとは言えないと思います。

377	各局、採算を度外視して、視聴者にとって必要な情報を CM なしで伝えていたのは好ましい。ただ、各局重複した情報が多いため緊急時に効率の悪さも目立ってしまった。このような緊急時には、国のトップダウン命令などで、各局の役割をすみ分けしてもよいのではないかと思った。特にテレビ東京はネット局を東北に持たないため津波の現状を伝えるのではなく、首都圏の交通状況や今後の備えなどに特化したほうが、視聴者にもメリットがあると思えた。
378	基本的には大多数の人間が知りたいことを伝えるのがテレビの役割だと思うのでやむを得ない状況だったと思う。ただ、不謹慎という言葉や空気を察知することは重要だが、そこをあえて突破する勇気というものも必要なのではないかと個人的には感じた。
379	5局+NHK が同じ様な内容の報道番組で横並びの意味がなかった…。番組制作者としては、報道の一員となって取材の手伝いをする用意をしていた。局員一丸となって、日本の危機を救う活動をしよう…と考えていたが。バラエティやアニメが国民の落ち着きを取り戻した様に各自のやり方で日本の支えになる活動をすべきだと思う。今は。
380	徹底的に堀下げした取材、発言がテレビではできていない。例えば、福島原発の真の現状など。マスメディアとしての視聴者に与える影響力を考えるとテレビの報道、取材はぬるく「嘘」が多い。テレビは報道機関ではあるがジャーナリズムではない（それは自分が 40 年近く前に入社した時の考えと全く変化していない）。
381	ニュースのワイドショー化に憤りを覚えた。自分はそんなしょうもない番組に関わりたくない。ちゃんと今必要なものを届けられるテレビマンでありたいと思った。
382	そういう時でも、みんなが楽しく見られる通常の番組を放送することは重要だと思った。毎日、暗いニュースばかりじゃ気が滅入る。
383	ニュースばかりが放送される中で、バラエティやドラマなどの娯楽が減ることで、子供達が逆に不安な思いにかられているのではと思った。被災地の情報を流すことは放送局として必要だが不必要なほどに、現場の悲惨な状況や、悲しみに暮れる人々のインタビューを流すことに本当に意味があるのかと疑問に思うことが多かった。
384	放送に携わる者として、改めてテレビというものの存在意義を考えさせられた。こういった場合にテレビは何をすべきか今後考えていかなければならないと思う。
385	むやみに放送休止といった対策ではなく、通常放送といった形でのバラエティ放送を行ったほうがいいのでは？と思う反面、被災地の方々の心情に沿う番組であるかどうかの自信も持てない、というジレンマを抱えていました。そして、バラエティはこういった時、無力だなあという思いも、この問題はこれから先も向き合っていくことになるだろうし、自分なりの答えを日々の仕事の中で見つけていきたいと思っています。

386	<p>かつてない規模の震災で各局とも報道に力を入れて編成を行ったが、そんな中でも競争意識から色々な問題が起こり、情けない思いがした。選挙報道の時もそうだが（今回は少々意味合いが違うか）、各局横並びの報道で競り合うことに果たして意味があるのか？視聴者が求めている情報を有効的に届ける為に、こんな時こそNHK、各局が協力して取材、報道に当たる事はできないものかと思った。取材地域の分担や、映像の共有等々…。又、過度の自主規制にも辟易とした。当然配慮は必要だがクレマーを恐れて（便乗クレマーも増えるが）必要以上に自主規制をかけてしまうことはやはり大問題であった。その結果、震災の報道ばかりがなされ、今度は子供らの心理的な悪影響…大人までもストレスを与え、経済的なマイナス効果も引き起こしてしまった。マス・メディアがマスに踊らされるという最悪の状況は（多少の犠牲を払ってでも）避けなくてはならないことではないでしょうか。</p>
387	<p>今回の様な事態にテレビ制作者はどの様な選択をすべきか非常に難しさを感じました。会社の利益？視聴率？ジャーナリスト的立場？早々と通常放送に切り替えた局もあれば報道特番を流しつつも“強い津波の映像”を異常なまでに繰り返し流し続けた局。そんな中での個人のテレビ制作者。少なくともこの先も起こりうる様々な非常事態を前に少なくとも1度、この機会を利用して自身の考えを整理しとく必要があるのではないかと。</p>
388	<p>今回のような大事が起きるとテレビの役割の一番は「報道」だと改めて思う。ただし、全局が横並びで延々とニュース特番をやり続ける必要はない。その局独自の判断でいろんな視点で取り上げるほうが正しいと思った。</p>
389	<p>被災者支援、被災地域の方々の感情を考慮する。緊急報道特番編成やCMの自粛など横並びで様子見の意識が強すぎる。</p>
390	<p>かつて、新聞は社会の木鐸と言われて来た。テレビも然りであると思う。影響力の強さは確かであるから、世によい流れを作る番組を作りたいと改めて思った。就職前にマスコミを目指した初心を思い出した。</p>
391	<p>今回の震災発生から報道番組のみの編成については仕方ないと思います。通常番組に戻った直後の番組内容については迷いがありました。ロケ内容、編集、ナレーション等の表現について過剰になりすぎているのでは？と思うこともありましたが、ガイドラインはない為、個々のプロデューサー判断という部分が多く、不安を抱えたままの番組制作でした。</p>
392	<p>震災発生当初は報道や編成の仲間、知人が非常時の下、テレビを見ている誰かを助けるために不眠不休で働いているのに我々バラエティ制作者はテレビを作っているにも関わらず何もできず、ただ早く帰ってテレビを見つめるだけ。マスコミに入ったのに何の役にも立てなかったことを悔やんだ。ただ、何日も震災報道をテレビで見続ける中で視聴者の精神衛生上も我々バラエティ制作者が作る番組が必要だという意識も強くなった。</p>

393	このような緊急時にはやはり信頼できるメディアであり、速報性もあるテレビは必要不可欠なものだと思った。依然、テレビは大きな影響力があるのだと思った。しかし、同年代（25歳）の人たちと話す、「テレビはあまり見ない」「情報はYahoo!ニュースから得る」「テレビよりはmixiやツイッター」などという意見も多く、今後テレビの影響力は落ちてくるのではないかと思っている。震災の話に戻すと、この様な緊急時にはNHKの視聴率が高く、「信頼性」という意味では圧倒的な差があるのだと痛感した。以上、内容がまとまっておらず、すみません…。
394	まず、今回の様な大型の天災の直後は制作という立場としてできることの少なさ、力のなさを実感しました。情報が混乱する中、放送局として責任を持ち、報道することを優先すべき時に、少しでも視聴者を不安にさせる可能性のある番組は放送すべきでないと感じました。
395	非常時の放送として、伝えるべき最優先事項が放送されるのは当然のことである。しかし震災直後ならば通常番組やCMが放送されないのは自然だが、ある一定の時間が経ったのであれば報道だけでなく、息抜きできるもの、心を和ませるものが放送されることが自然だと思う。一定時間経過後という条件ならどの放送局も同じものを放送していたのでは、視聴者の心を満たすことはできない。ただその「一定時間」がどのタイミングなのかが未曾有の状況の中で判断しづらいところだ。CM出稿しているスポンサーも同じだったと思う。視聴者の心の平静を保つためにもバランスがとれたプログラムが必要だと思う。エンターテインメントの番組制作者としては、辛い現実報道とは反対側にある「心やすらぐ番組」を視聴者に届けたいと心底感じていた。
396	被災地の情報を流すのは重要だが、各局同じことをやる意味はないと思う。非常時に各社分担して違う情報を送るようなシステムを作る方が、テレビ全体として意義があることだと思う。テレビ局の数だけ上空をヘリが飛んだり、取材クルーが大挙して押し寄せたりする。毎回同じ事の繰り返しですよ。
397	義援金や物資でない援助として、番組を放送し届けるという意義を感じました。
398	制作の部署として、直接震災の仕事（報道の）と関わることがなく、このような場合は自分もテレビ人として、震災報道に携わる仕事がしたいと思った。
399	伝えるべき情報を過剰な演出にならない様にして、視聴者に伝える。基本的なことですが、これを実行することが最も大事なことだと思います。
400	震災の前と後では視聴者のTVに対する見方が変わったと感じている。日本・家族・絆・やすらぎ・安全・安心などのキーワードが重要性を増した。発生直後の放送態勢としては、今回の対応は正しかったと思うが、全局が同様に横並びの報道をすることには疑問を感じた。子供やお年寄りなどのケアをする番組編成も必要であったと考えている。今後はエリアごとに横の連絡を密にして、各局が協力連携した取材及び放送を考えるべきだと思う。
401	大災害時の報道態勢は当然と考える。

402	<p>全局が数日経っても同種の放送していることの意義、違う番組を放送することの意義・勇気について考えた。結局のところスクープ合戦になる報道よりは災害からは一時気持ちをそらしても、やわらがせたい人へのバラエティが大切な事がある。そういう局が必要だと思う。全局足並みそろえての行動（数日経っても）を“チョッと不思議だぞ”と思う精神は必要。また、マスメディアが世の中の空気をつくってしまう可能性一つらせてしまう可能性の怖さを感じた。いかに自立した精神・姿勢を抱いていけるか、が我々の使命であると思う。</p>
403	<p>3月15日から生放送を復活しました。内容としてはアジアのバラエティ番組なので放送するならば楽しく普通の番組を…とと思っていました。MCのコメディアン<small>の</small>女性2人はこんな状況で騒がしいことはしたくない、“イケメン”とか言ってる場合ではない…と言われましたが、当初の内容を変えることなく放送しました。表情はどうしても固くなりがちでしたし、いつ緊急放送が入るかもしれない中での生放送は、出演者にとって負担であったのは事実ですが、MCもちゃんとやり遂げてくれました。番組ではツイッターをやっていますが、そこでのコメントでは、「久しぶりに普通に笑えた」など「辛い映像ばかりだったので普通の番組で安心した」という意見もありました。個人的にも生放送ならでは…の安心感のようなものが、確かにこのような状況では必要だと感じており、放送してよかったと思っています。批判的な意見もあるかもしれませんが、いつでも何が必要か災害に対しても風化させない気持ちを持ちつつ“何ができるか”を考えたいと思っています。</p>
404	<p>数日間CMなし報道が続いたが全ての局が同じ態勢を必ずしもとらなくていいのではないかと数日のちに思った。報道以外の番組を流すにしても内容は問われるところではあるが…。</p>
405	<p>このスペースでは無理です。</p>
406	<p>（報道特番が落ち着いた後）下手にACの広告を入れて放送するのではなく、節電と世の中で騒がれているのだから、各局一斉に放送を中止すればいいと思った。放送するのならGH、PT帯までにして、各局深夜～早朝停波すれば良いと思った。</p>
407	<p>テレビ東京だけかもしれないが、明らかに連日生放送を続ける体力がなかったように感じる。にもかかわらず制作ということで何の手助けもなくはがゆい思いをした。非常事態は報・制関係なく番組をつくりたいと思いました。悲惨な映像を流すことについてはもうこういう仕事をしている以上、特に不快になることはなかった。</p>
408	<p>視聴者にとり何が必要なのかを考える機会となった。求められている世の中のマインドを感じ番組制作をしたい。</p>
409	<p>民放各局がその日、その日ごとに震災報道を担当し、横並びをやめるなどしないと、冷静に通常放送に戻せないのでは…と日々感じていた。制作者でもあり視聴者の目で見ても“ACのCM”には「いい加減にしろ！」と思った。</p>
410	<p>民放各局の報道が似通っていたように思う。突然のことに対応し、報道することは非常に難しく、全ての放送局が全力をつくしたと思うが、各局のすみわけなどをすることによって、もっと情報が整理できたのではないかと…。震災によって、テレビ報道の重要性を改めて感じることもできたが、テレビ報道の限界も感じたように思う。</p>

411	全局全番組が同じものをずっとやり続けることに疑問を感じた。様々な情報、娯楽など総合的に放送すべきと思った。
412	どのチャンネルも一様に震災報道を行っていたことは視聴者にとっては逃げ場のないストレスでしかない。また、被災者へのレポートなども神経を逆なでするようなものが多く、不快感でテレビ報道のレベルの低下が見られるような番組も多かったと思う。
413	全局横並びの放送は必要であったのか？未曾有の事態であればこそ、各局の役割分担があっても良かったのではないかと思う。テレビ局員よりも先に一般視聴者などがツイッターなどで、テレビで「あんなこと」や「こんなこと」を放送してほしいと呼びかけがあり、それを人づてに局員が聞いて対応したケースもあった。情報伝達ツールとしての電波の使い方を今後、事前に各局で調整をするべきではないかと思う。※例えば、電波を通して行方不明者を探す家族が呼びかけるなどは一番先にツイッター上で話題にあがっていた。また、通り一編の震災報道ではなく、何と言われようと娯楽（エンターテインメント）としてのテレビの役割も存在するので、批判に耐えながらも通常放送を少しでもはさむべきではなかったかとも思う。
414	緊急特番、NoCMは当然のこと。テレビの情報量は圧倒的であるが報道される情報がきちんと検証されているか不安になった。誤った方向に見ている人たちをミスリードする可能性をはらんでいる。一過性の情報だけでなく今後提供した情報をきちんと検証する報道が重要である。
415	緊急報道の時、各局の連携が出来ればというのが理想。子どもたちはある種の異常な光景しか映されないテレビの画面に心が病みそうだった。同じような画面ばかりだった…。被災地が広範囲ゆえに何か連携して情報を手分けしてまとめ、放送できれば…というのはあくまでも理想だが、これだけの非常事態を国民と共有するテレビの使命として、横の連携も考えるべきだと思った。

いかがでしたでしょうか。

各局の番組制作の第一線にいる人たちが、若干の遠慮や立場を考えてはいるものの、率直な思いをぶつけてくれたのではと感じられます。たぶんこのような形で、各局のプロデューサー、ディレクターの方々のナマの声が、同一平面上に紹介されたことは過去にないのでは、と思います。このなかに、いろんな問題や検証しなければならないことが含まれていることがわかります。お忙しいなか、豊富な現場の声を文章にしてくれた 415 人の方に感謝したいと思います。

さて、何故この調査が行われたか。

この調査は、BPO 青少年委員会が、在京キイ局の番組制作者に対し、彼らがどのような意識で番組作りをしているのか。それが始まりでした。青少年委員会の調査チームが在京キイ局をまわり、現場のプロデューサー、ディレクターに意見を聞いたのが、2010年7月～8月。私も調査メンバーのひとりとしてその場に立ちあいました。

そうした予備調査をもとに専門家の萩原委員がアンケートを作りました。その時期にハ

プニングが起りました。2011年3月11日。未曾有の大災害。「東日本大震災」です。この大震災は大地震、大津波、原発の水素爆発という三重苦を含んでました。否応なくテレビの役割とは何なのか、を突きつけられたわけです。

歴史的に見れば、番組制作者たちの意識調査を越えてしまった事態が起ったと言えるでしょう。この歴史的な事象をまったく無視して、単なる制作者たちの意識調査アンケートだけでお茶を濁していいものか。青少年委員会でも話題になりました。歴史の証人として記録を残しておくべきことではないのか。

さらに原発事故における、政府、東京電力の発表に、「大本営発表」の匂いが感じられました。それに対してテレビの世界の人はどう思っているのか。それを聞いてみたい。委員個々の温度差はあったでしょうが、「東日本大震災」を避けて通るべきではないのではないか、という雰囲気、醸成されました。

私個人は、3月11日のことにまったく触れずに済ますことは、人間として許されないと思いました。

原発の水素爆発は、一過性のもではありません。間違いなく、放射性物質を浴びた土地やそのまわりに住んでいたたり、たまたま爆発に出くわした人々は、自分だけでなく、子々孫々まで影響を受けるでしょう。健康被害のみならず、生活の崩壊、精神的苦痛、その他そこから派生する苦しみが一生つきまとうでしょう。さらに放射性物質は、地球規模で拡散します。土壌、海、川、森林。食物。飲料水。大気。その他すべての生態系に悪影響を及ぼすことは、過去の歴史が物語っています。

「いまのところは大丈夫」とか「とりあえず心配ない」などと、根拠の薄い無責任発言を繰り返す政府。さらに真実を語っていないと思われる東京電力に対し、多くの国民が疑問を抱いていました。

被災者の方々だけでなく、心ある国民なら誰しも、政府と東電の嘘や隠蔽している事実を、テレビ局はどう受けとめているのか。どう対処しようとしているのか。聞いてみたいと思う気持ちを持つのは必然でしょう。

「大変なことが起こった。下手すると千葉の北部ぐらいいまで人が住めなくなります。福島原発が水素爆発を起こしました。たぶんセシウム137、ヨウ素が大量にバラまかれたことでしょう。米軍が、日本政府に大量の原発を冷やすための冷却水を提供しようとしたのに総理が断ったため、爆発が起こった。放射性物質は日本国内はもちろんアメリカ西海岸まで大気中をおおうでしょう。

官房長官が、会見してますが、事実を話してない気がする。もしホラ貝だとすれば、詐欺罪どころではなく、国家の存亡にかかわる国家犯罪です。のちに真実はわかる筈です」

長年、放射性物質に携わっている医師はすぐに私にメールをくれました。複数の心ある医師に確認しましたが、同じ意見でした。

アンケート調査のなかに、「東日本大震災」の項目を加えなければいけないのではないかと確信しました。ところが、このアンケート調査は、もともと「ドラマ、バラエティ」



を制作しているプロデューサー、ディレクターに対しての調査でした。「報道」のPやDを対象にしたものではなかったのです。

東日本大震災は、報道がメインの立場になる出来事です。ドラマ、バラエティの管轄ではありません。

スジ論から言えば、アンケートに「東日本大震災」を加えなくてもいいのです。しかし前述したように歴史的かつ社会的に見た場合、テレビ局はこの現実から眼をそむけることはできない。2011年は「東日本大震災」が起こった年と歴史的に刻まれるでしょう。大地震が、起ったあとにアンケートを行うタイミングのなかで、これに触れないわけにはいきません。テレビ制作者たちの意見をいれるべきと思いました。

私個人としては、現場体験をした報道関係者。番組を編成した編成局。スポンサー対応に苦慮したであろう営業局。その上にいた役員クラス（NHKの場合は、政府の意向が働いたであろうから、それに対応した人たち）の方々に対してもアンケートを行い、ナマの声を聞いてみたい欲求に駆られました。

千年に一度の歴史的出来事ですから。それぐらいしてもいいのではないかと。ただ現実に行うとなると、BPO事務局と各局との調整が必要です。スケジュールの問題もあります。たぶん、時間と手間がものすごくかかるでしょう。アンケートに応じることを拒否する局もでてくる可能性もあります。

そのうえBPOの親会社は、NHKと民放全局ですから、事務局は辛いだらうな。板ばさみになるだらうな、とさえ言い出さませんでした。BPOにいる人たちの殆どはNHKと民放出身者ですから。

微力ながら、その作業は私が細々とやればいかな、と。

そうしたなかで、「東日本大震災」は、バラエティとドラマの制作者の方々へのアンケートの“おまけ”的な感じで、一項目つけ足されました。B4サイズ、400字原稿用紙一行程度です。

その意味では、「東日本大震災」の現場へ行っていない人たち（数人の方は体験。体験者のアンケートは視点が違います。）の“外史”です。“正史”のない“外史”です。

といっても、バラエティ、ドラマのPやDの方々も、テレビ局で同じ釜のメシを食べている人達です。部署は異なるものの、局の事情や雰囲気をよく知っています。逆に、醒めた「眼」で局内で起っていることを見ることのできる歴史の証言者ともいえるでしょう。アンケートをお読みになれば、そんな感じも伝わるかと思えます。

またNHKの方々も民放と異なります。NHKのシステムといってもいいでしょう。ここにアンケートを記してくださった方々は、現在はドラマ、バラエティ担当ですが、入局後は日本全国の放送局勤務を経験してきた筈です。各地で社会ネタを扱う報道記者体験をしてきた人々です。

事件、事故、災害、裁判所、警察、政治、経済などあらゆる分野の取材をしている筈で、そこでの体験を通して報道の視点を養ってきた方々とお見受けします。

そうした背景を汲みとってアンケートをお読みいただければ興味深いと思います。かくして、このアンケートは、BPO 事務局から在京キイ局の BPO 担当者へ、2011 年 5 月 13 日付で送付されました。BPO 事務局への回収（しめきり）は、6 月 15 日でした。つまり、このアンケートは大震災発生二ヶ月後の時点で記されたものということになります。

\* \* \* \*

先程、ちょっと記しましたが、私は“正史”に触れたい思いがありました。現場へ行った NHK、民放の記者の方々に直接話を聞くことで報道とドラマ・バラエティ双方の意見が記せます。まさに細々と、微力なモノ書きの取材ですが、一断面にはなるでしょう。

20 年ぐらい前から私はマグロを中心にサカナの世界を何冊か書いてました。気仙沼は、鹿児島県いちき串木野と並ぶマグロ船団の一大出港地です。塩釜にも東沖のマグロがあります。三陸はカツオ、サンマなどの水揚げ港です。そこは今回の震災で最も被害のひどかった場所でもあります。そうした地域へ出かけながら、現地で取材をしている報道の人たちにも会いました。サカナ世界の伝手で現地取材から東京へ戻ってきた人たちとも話しをしました。

4 月からこの稿を書いている 11 月の初旬まで毎月のように被災地へ行きました。現場に足を運んでいると、いろいろな人に会えます。今回の大震災に関った政府関係者、政治家、現地に長期応援に行った首都圏の警察本部、自衛隊の人など。かつて付き合いがあった人も少なくありませんでした。

放射性物質を扱う医師や、水の専門家、海の専門家、自然災害のスペシャリスト。津波や沿岸災害の専門家とも交流を持ちました。そのようにして、足りない部分を埋めていきました。素人の私が何故そんなことをしたか。

偶然ですが、東日本大震災が起る 1 年ちょっと前まで、神奈川の相模湾を舞台にした自然災害（地震、津波、三角波）をテーマにした作品を 1 年半ほど新聞に連載していました。相模湾は、大正 12 年 9 月 1 日に起った関東大震災の震源地です。相模湾南西部 1200 メートルの海底を走る“相模トラフ”がそうです。再び大地震が起っても不思議ではない。そう予測して単行本にまとめるための再取材をしていたところでした。

足かけ 5 年ぐらい地震や津波を含めた自然災害のことをやってきました。関東大震災の記録、三陸大津波の記録も読んでました。首都圏で複合型の大地震が起れば東京湾、相模湾の沿岸部は壊滅することも理解していました。そうした蓄積のなかで、本音で語ってもらった報道関係者のことばが下記のものです。

青少年委員会に届いた、ドラマ、バラエティの制作者の方々の考え（見方）を要約して伝え、それに対する感想も含まれています。以下、どうぞ。

## 2 報道関係者は

A「青少年委員会でそんなアンケートをしたのですか。面白いですね。内容を聞いた感じで

は、そんな考え方、見方もあるのかと興味深かったですね。勉強させていただきました」

B「AC のコマーシャル量が異様だった。被災現場にそぐわなかった。被災者の方も嫌悪感を持ったのでは。何か別の手立てはなかったのだろうか？」

C「現場の避難所では安否情報、メッセージ板は役に立っていた。その後、民放でメッセージを個人的に伝える放送をしていたが、このような被災者がまだいるのだと、伝える意味があった。東京にいる人にはピンとこないでしょうが」

D「たき出しのボランティアが、日本全国から被災地にやってきたが、ムダが多かった。メニューがワンパターン（カレーと豚汁の組み合わせなど）で、高齢者や中年の人は食べきれない。大量に係員が捨てていた。こういう話をメディアは伝え、善意がムダにならない気配りが欲しい」

このような感想が入り口になり本音がすこしづつ出てきました。

良心的な報道関係者が、最も関心を持ったのは（私が当たったなかでですが）「大本営発表」「スポンサーとしての東京電力」が両横綱でした。ずっと間があいて「テレビ報道とラジオ報道」に関してでした。

まずは「大本営発表」報道に関する本音です。

E「民放各局は原発の解説を誰にするか苦慮した。報道記者たちは、まったく原子力の知識がなかった。そこで、権威が誰か。躍起になって探した。報道に重みを増すために。そこで誤った。あとから考えてみるとわかることだが、“権威”というのは“原子力村”の先生方だった。ドブプリと原子力の甘い汁を吸った、国民に危害を加えた側の人だった。ホントのことを言う訳がない。特別な利益を得て原発推進に加担した人たちでしょう。民放各局とも、あとになって政府や東電のウソがバレるたびにうしろめたさを感じたと思う。放送局も加害者です」

F「NHK の記者だって正しい分析ができたかどうか。民放を含め検証すべきだろう。民放はふだんから科学記者を養成しておく必要がある」

G「大本営発表を垂れ流したテレビ局の罪の検証をすべきではないか。みなさん自分の胸に手を当ててみればわかるでしょう。嘘をわかっててそのまま垂れ流した」

H「大本営発表と分かっている現場ではいちいち検証している時間はなかった。政府と東電が彼らの責任で発表しているんだから。それでいいじゃないのということになった。それを批判するする人もいるが、各局の報道が違う、おかしい、とその場で言い切れるだけの根拠を持っていたのか」

I「今回の震災報道は NHK のひとり勝ちだった。しかし、民放各社の報道も踏んばって競わなければいけない。そうしないと、NHK の報道が大本営発表になってしまう」

J「太平洋戦争の時、日本のマスコミ（新聞、ラジオ）は政府のお先棒をかついだ。戦後 70 年近くなって、罪滅ぼしのためか、検証報道をしているが遅すぎる。われわれの DNA は長

いものに巻かれるから、その DNA が子孫であるわれわれに残っていて、変えられない。頭でわかっていても行動に移せない」

K「原発は人災でしょう。みんなわかっていたけど、流された。マスコミは片棒かついだ」

#### 東京電力問題

A「東京電力という大スポンサーについての検証が必要不可欠。今回の報道のあり方だけでなく、過去の報道を含めてだ」

B「過去に良心的な番組づくりをしていた報道マンもいた。しかし、北海道から九州まで電力会社は大スポンサーとして君臨している。東京電力はその最たるものだが、番組を作れない。原発関係の番組を下手に作ると飛ばされる」



(提供：東京電力)

C「ベネフィット。経産省の役人、政治家も、メディアの一部の幹部も東京電力からベネフィットを得てるから何もできなかった。長い間、ずっとね」

D「東京電力はマスコミ操作がうまい。原子力安全・保安院も、原発事故の直後、スポークスマンをやったあの人。事故が起る前までは TPP のことをやっていた。そんな人に原発のことがわかるわけない。わからない人を原発のスポークスマンにする。うまいやり方だ。わからないから、答えられない。そうすれば真実や都合の悪いことが隠せる」

E「地震が発生した日。首相官邸の地下一階で首相、経産省はじめ全省庁の大臣、幹部が集められ、会議が開かれた。その時、原発の現場へ行かねばならない、“自衛隊”“警察”“消防”の幹部も呼ばれた。彼らは、放射性物質の線量がどれほどあり、どれほど危険なのかを知りたかった。首相、東電、経産相らに“数値”を尋ねた。しかし、政府、東電はひと言も発しなかった。生命を賭して現場に行く人たちに情報を与えなかった。信じられないことだが日本の警察、自衛隊、消防は安全基準を知らされないままで出動させられた。こんなひどい話ありますか。この話に象徴されるんじゃないですか。今回の大震災は。もっとひどいのは、そういうことを知っていてもマスコミは報道しなかったことです」

F「いまでも、本当の放射性物質の数値はわからない、と心ある人は言ってる。海や自然がどれだけ汚染されていることか。そのツケは、いまマスコミや世の中を牛耳ってる老人たちの、子供や孫にまわってくるのに。報道がどこまで暴けるか」

#### テレビ報道、ラジオ報道、ソーシャルメディア

A「野村総合研究所が、3月の大震災後に関東エリアで、人々がどのメディアから情報を得たかをアンケートしました。それによると、NHK テレビ 80.5%、民放テレビ 56.9%、3位がネットのポータルサイト。4位が新聞。ツイッターなどネットのソーシャルメディア 18.3% だったそうです。まだ、テレビの報道は、生き残っている。だけど、内実はお寒いところ

にきてる」

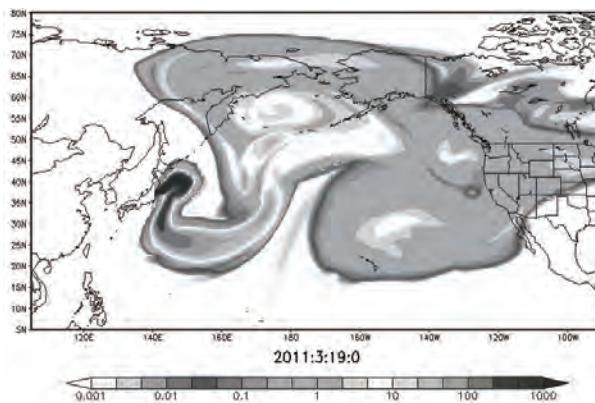
B「東北の被災地や北関東の一部、24市町でFM放送を使って臨時放送局が開設されたそうです。そこからいろんな情報を被災者に流した。被災者や自治体もネットで情報を発信しました。新聞が配達されない。停電でテレビが見られないので被災者の役に立った。テレビは無効だった。われわれも被害のひどい地域にはいった時は、情報がないのでラジオと個人情報だけが頼りでした」

C「避難所へ行っても、テレビが1台。あるいは2台。停電のところはテレビが映らない。東京からいくら番組を流しても、一番困っている人達にはまったく伝わってなかった。また伝わっても、広い避難所じゃ、人が多くてテレビを見ることができなかった。これは東京の自己満足じゃないですか」

\* \* \* \*

こんなところですよ。4月から10月まで被害が最もひどかった沿岸部を中心に歩いていると、復興はまだまだ、ということがわかります。いまテレビのニュースは「サンマの水揚げ」「カツオの大漁」などを流していますが、気休めに過ぎません。政府が無責任なので復興プランが決められない。予算が成立しないからです。あまりにもスピード感が乏しい。復興委員長が記者会見で嘆いているのをニュースで見た方も少なくないでしょう。(注 第三次補正 11月21日、やっと通った)明らかに被災地のヤル気を殺いでいます。その体たらくを熱い心をもって正確に伝える報道が少ないのではないかと。

いまでも、原発から排出した放射性物質は、大気となって地球をまわり、海に落ちます。海に落ちた放射性物質は海流に乗って太平洋に運ばれます。気象庁気象研究所(茨城県つくば市)などの研究チームが11月16日までにまとめたデータは衝撃的です。ヨウ素131/セシウム134/137が太平洋全域、ロシア極東地域、アラスカ、アメリカ西海岸に放射性物質は落下します。特に海洋汚染は甚だしいことがわかります。



(提供：気象庁気象研究所)

そこで何が起きるのでしょうか。

「特に原発関連の場所にいた人は気の毒ですね。あと5年～10年したら骨肉腫や白血病がどれだけ発症してくるか。心配です。なぜ、水素爆発をしたとき、政府はスピーディがありながら国民に知らせなかったのか？3月12日から15日までと3月20日から22日までに起ったことの意味を、放射性物質の本当の事をなぜメディアは国民に知らせなかったのか？悔いが残ります」

放射性物質を日常扱っている医師の率直な感想です。

さらに原発の事故の際、福島第一原発が安全ではなかった。167頁で放射性物質を日常的に扱っている医師の予見が正しかったことが証明されるニュースが流れました。11月12日、福島第一原発の吉田昌郎所長が、報道陣に明らかにしました。

「3月11日から一週間が一番厳しかった。次にどうなるか想像できない中で、出来る限りのことをやったという状況だった。死ぬだろうと思ったことは数度あった」



(提供：東京電力)

しかし、この時期、政府や東電は正確な情報を発表していなかった。まさに「大本営発表」だったわけです。たぶん原発の水素爆発から一週間がすべての事象の基本でしょう。報道が命を賭けるべき正念場だったと思います。薄々はメディアのみなさんはおかしいと思っていたわけですから。結果論ではなく、原発・核の事故は起きた日から数日が勝負でしょう。そんな事は素人の私にもわかることです。それが為されていなかったことが明らかです。政府や東電に科学的知識をぶつけて迫るべきだった。それを怠り、偽りの情報をタレ流した事で、どれほどの国民の人生を不幸に陥れたことか。

この吉田所長のことばを、最も国民に影響を与えるメディアと自負しているテレビの人たちは、深く／深く／深く受けとめるべきではないでしょうか。そしていつの日か、自局の電波を通じてなぜ大本営発表がタレ流されたかを **ON AIR** すべきではないでしょうか。

\* \* \* \*

## P・S

2011年12月29日に青少年委員会からこの稿のゲラが届きました。同じ時期の12月26日に政府の「事故調査・検証委員会」（畑村洋太郎委員長）の中間報告が発表されました。また、NHKや民放局の一部でも、3月11日の事故発生から原発の水素爆発、その処理、対応がどのように行われたかの番組が制作されました。

そのなかで、政府（原子力災害対策本部）の動き。官邸（5階の執務室）と地下（危機管理センター）の動き（執務室は菅首相、関係閣僚、斑目春樹原子力安全委員長、武黒一郎東電フェローらが入室、協議。）

（危機管理センターは、関係省庁の職員の仕事場。FAX回線混乱、携帯使用不可だった。）がわかりました。そして保安院の動向。さらに東京電力（本店）と福島第一原発のやりとり。地元の動きもわかりました。

日本の中枢がどう動いたか。地元はどう対応したか、が公表されたわけですが、その結果、この稿で疑問を呈した事が明らかになりました。

- ① 官邸の5階と地下の情報共有がなかった。
- ② 官邸と保安院との関係もズサンであった。
- ③ 東京電力と官邸、保安院の間で有効なコミュニケーションが断絶していた。情報把握と情報共有化の少なさ。

- ④ 現地対策本部（福島）は機能せず、孤立化させられる。
- ⑤ 国から地域住民への放射性物質の拡散に対する避難命令（同心円避難の誤ち。高線量地域である、福島県飯舘村に対する情報伝達の致命的な遅れなど）の不適切さが実証され、人災であることが指摘された。
- ⑥ 当時の枝野幸男官房長官の会見での、ことばの使い方の不適切さ。「直ちに人体への影響を及ぼすものではない」という表現のあいまいさが問題視。→これによる被災地住民の健康被害の拡大。

などが指摘されました。枝野官房長官をめぐっては、2012年1月8日付朝日新聞一面で、筆者が、171頁、C「ベネフィット」で指摘した情報を裏付ける、記事が掲載されています。

「東京電力が電力業界での重要度を査定し、自民、民主各党などで上位にランク付けし、パーティー券を購入していた計10人の国会議員が判明した」という記事です。

枝野官房長官(当時)は2010年までの数年間、東京電力の上位ランクに入っていました。しかも、表面化しない20万円以下の金額で東京電力が購入していました。民主党では仙谷由人、小沢一郎と並ぶビッグ3で、他の議員より金額を多く得ていました。(ちなみに自民党は、麻生太郎・甘利明・大島理森・石破茂・石原伸晃の5人です)

東京電力がねらいを定めたひとりが官房長官に就任していたわけです。

\* \* \* \*

また、政府とは別に、民間の独立した立場でこの事故を調査する委員会も立ち上がりトップ（委員長）に就いた北澤宏一氏（超伝導物質研究の第一人者）は「一人ひとり正直で善良な市民なのに、全体では無責任でコントロール不能」と、聞き取り調査後の感想をメディアに発表しました。(2012年3月までに、英語版で世界に向けて報告書を作成することです)

\* \* \* \*

これらの事実から、日本のメディアが原発事故に対する政府、東京電力の発表を、鵜呑みにしたまま報道したこと。「大本営発表」であることは明白になったと言えるでしょう。この歴史的事実は重く、消えることはありません。70年以上も前、太平洋戦争の遂行に加担した新聞・ラジオのDNAが、テレビに代っても変わっていなかったといえるでしょう。何も変わっていなかったことはおそろしいことではないでしょうか。なぜメディアは大本営発表を受け容れてしまったのか？

なぜ、メディアは政府や東京電力に対して、敢然と闘いを挑めなかったのか？

それを検証する義務があるのではないのでしょうか？

もちろん良心的な番組も存在します。が、まるであと出しジャンケンのように、辻褄あわせでほころびをとり繕っているような検証番組も少なくありません。しかも、大本営発表には触れずにほっかぶりをして。これでいいのでしょうか？そう感じるのは私ひとりだけでしょいか。